逸話集

偉大な人間 金正日 2

逸 話 集

偉 大 な 人 間
金 正 日
2

李 一 馥

朝鮮・平壌
外国文出版社
1995

目　次

1　指導芸術と献身性

湖が海に

　1967年7月下旬、土用のうだるような暑さがつづいていたある日の昼どき偉大な指導者金正日同志は東海の海辺にある淡水湖長淵湖（チャンヨン）の湖畔を歩いていた。随行する地元の幹部たちは、咸鏡（ハムギョン）南道現地指導中の金正日同志を迎えて喜んだが、休息もせず酷暑をおかして訪ねてきた金正日同志の質問に満足すべき返事ができないのが心苦しかった。

　広い東海と美しい長淵湖をひかえていながらも、地元の水産協同組合員たちが貧しさから抜け出せないでいることを知った金正日同志は、深い物思いに沈んだ。

　水協の幹部は地元の実情を詳しく語った。

　「この海辺は波が荒く船をつけるのがむずかしいうえ、高い波に網がさらわれたり、ブイが岸にうちあげられたりするので、小規模漁業や浅海養殖には向きません。それに長淵湖は淡水湖なので海草の養殖もできず、浅瀬からときどき潮水が流れこむので淡水魚の養殖もできません。それで、当地ではこの湖を絵のなかの餅と言っています」

　「絵のなかの餅…」

　金正日同志は低くつぶやいた。幹部たちは自然のなすたわむれが自分たちのせいでもあるかのようにうなだれた。

　金正日同志は息苦しそうに襟のボタンをはずし、砂浜に立ち

どまって湖と海をかわるがわる眺めてはその不利な環境に先祖代々慣らされてきた住民の窮状を哀れむように立ちつくしていた。やがて、潮水が入ってくるからには湖と海がつながっているわけだが、それはどこか、とたずねた。

かれらは伝馬船がやっと通れる瀬へ金正日同志を案内した。

砂丘に立ち、瀬の長さと深さ、湖の深さを目測しながら考えこんでいた金正日同志の目が輝いた。

「長淵湖のこの浅瀬を深く掘れば、大きな船が通れるし、海魚も長淵湖にもっと入ってくるでしょう」

そして、瀬を掘っても波のために埋まる恐れがあるから堅固な防波堤を築き、底を深くさらうことだ、当地の水協を盛りたてるカギはこの瀬にあると言って豪快に笑った。幹部たちは目の前が明るくなる思いがした。

浅く狭い瀬を運河のように深く広く掘り、海と湖をつなげば、潮水が湖に流れこんで海魚が繁殖するだろうし、波の立たない湖には漁港が建設できるから、有利な点が少なくない！

先祖代々数千年ものあいだ長淵湖畔に住みついている住民たちも不利な自然環境をかこつだけだったし、助力にやってきた多くの人たちも考えつかなかったことを、金正日同志は即座に解決したのである。

「どうですか」

金正日同志は興奮している人たちに意味ありげにたずねた。するとさっきの幹部がうれしそうに答えた。

「そうすれば長淵湖が海になり、すべてがうまくいきそうです。おっしゃられたように大工事をおこないます。これで長淵湖は絵のなかの餅でなく膳の上の餅になりそうです」

金正日同志は微笑した。その微笑を見ると、湖と海にもたらされる変革の新しい歴史がもうはじまったかのように感じられるのだった。

その後、金正日同志は、長淵湖の瀬を掘り防波堤を築く工事に、労力、設備、資材を送る対策を講じた。こうして津波に耐える漁港が湖畔に建設され、広い湖は豊かな漁場、りっぱな海草養殖場になった。

一つの噴水を設けても

1975 年 10 月 24 日の夜遅くまで万寿台（マンスデ）芸術劇場の設計図を検討していた金正日同志は、噴水をどうしてこんなに小さく設計したのかとたずね、劇場の大きさと制限された敷地を考慮してそうしたという設計家の答えを聞くと、党中央委員会の関係者たちに向かって、同じ意見かとたずねた。かれらは設計が金正日同志の意にそわなかったことに気づいたが、噴水形成案はみんなで討議し、合意を見たものだと答えた。公園や遊園地の場合と違い、大建築物周辺の噴水は建築物に調和させてこじんまりと作るのが慣例だったのである。

金正日同志はちょっと考えてから、万寿台芸術劇場前の噴水は、慣例にこだわらないで、劇場前から第一百貨店前までを大公園区域にし、そこへ大規模に設置すべきだ、幹部はつねに人民のために心を配らなければならないと言った。

「噴水装置をすれば、人民が気持ちよくくつろげます。そういうものがないから、いまは休息も青年公園へ行ってしかできません。…　大型噴水を設ければ、万寿台芸術劇場が人民にいっそ

う親しまれるでしょうが、それは人民に与えるわれわれの贈り物になるでしょう」

関係者たちは既成概念にとらわれていた自分たちの誤りに気づいた。

夜は静かに更け、いつしか明け方の4時すぎになった。前日も6時間にわたる活動の討議で徹夜をしたが、きょうもまた夜を明かすのである。

その後もかれらはたびたび金正日同志の助言を得て噴水公園の設計を大きくしなおし、工事をおし進めた。

1976 年8月 25 日、噴水建設が完工すると、昼食もとらずに現地を視察した金正日同志は、水しぶきを爽快に吹きあげる第1号噴水のまわりを歩きながら、噴水の高さや形態を見て、水の高さがまだ低いようだからもっと高くしよう、また噴水の形態は変化に富んでこそ興があるから、そのための設備をととのえることだと指摘し、それでもなにか物足りなさそうに噴水のまわりを歩き、子どもたちが池に溺れるようなことがあってはと池の深さを測ったり、噴水彫刻をよりよく生かし、夜、噴水の色彩をさらに美しくするにはどうすればよいかなどを語った。

傘型噴水の前では、噴水が見事だが、道路よりも高いところに設けてあり、それに水槽の壁に隠れて通行人の目によくつかないようだから、傘型噴水をところどころに他のものと組み合わせて設け、それも通行人によく見えるよう階段式に多く配置すればよい、噴水池のまわりには金剛（クムガン）山に似せて天然石を多くおき、景色をもっと美しくするようにと言った。

真昼の日差しは暑かった。しかしそれを気にするふうもなく噴水のまわりを歩いていた金正日同志は、ふり返ってたずねた。

「噴水の濾過装置はできていますか」

思いがけない質問だったので、誰も返事ができなかった。毎日使用する大量の水を濾過しようとは考えてもみなかったのである。飲料水でもない、ただ吹きあげるだけの水だから濾過消毒装置をしなくても別条ないし、高く吹きあげて落ちるので殺菌はおのずとできるとも思ったのである。

「噴水濾過装置がなければ必ず設けなければなりません。人民が大勢集まる場所だから澄んだきれいな水を使うべきで、濁った水を使ってはいけません」

既成慣例にとらわれないその言葉は、人民をこのうえなく愛する金正日同志ならではの指摘であった。こうして万寿台噴水公園の噴水は、濾過されたきれいな水を吹きあげ、その水煙には美しい虹がかかるようになった。

大胆な作戦

1975 年７月１日、摩天(マチョン)嶺の深い谷間にある剣徳(コムドク)鉱山を訪れた金正日同志は、8,000 メートルに達する４・５坑の切羽におもむいて、鉱山労働者と膝を交えて生産を高める方途を相談した。

切羽を見てまわったあと、坑の事務所に立ち寄った金正日同志は、鉱山の幹部が持ってきた図面を注意深く見た。そして採鉱場の位置、採鉱法、生産状況とその展望などをいちいち確かめてから、ちょっと計算をし、鉱山の選鉱能力に比べて鉱石処理量が少ないが、なぜかとたずねた。

しばらくは誰も返事ができなかった。選鉱場設備のフル稼動は長年にわたる懸案の一つであった。かれらは、鉱車台数と運鉱

回数を増やそうと八方努めたが、運鉱能力が限られていて抜本的な打開策が立てられなかった、と申しわけなさそうに答えた。

ちょっと考えた金正日同志は、選鉱問題を解決する方途はなにかとたずねた。

「運搬坑道をもう１本建設し、鉱車を大型化すればいくらか改善できましょうが、さしあたっては坑ごとに鉱車台数を増やすほかなさそうです」

金正日同志は慎重な面持ちで、鉱車１台の鉱石積載量、電車１台当たりの鉱車牽引台数と交替当たりの回転数はどれほどかとたずねた。

１度に 35 トンで９回転、１日 315 トンの鉱石が運搬できるという答えに、今後坑をいっそう現代化すれば毎日数千トンの鉱石が掘り出されるが、そうなれば鉱車と電車をそれぞれ何台増やさなければならないかと聞いた。

返事がなかった。電車や鉱車をもってしては問題が解決できないと悟ったからだった。沈黙が流れた。

「運搬問題を決定的に解決すべきです。運搬問題を解決するには大型長距離ベルトコンベヤー輸送ラインを設置しなければなりません」

短距離でもなく地下 10 数キロの切羽まで大型長距離ベルトコンベヤーを設置することについては、誰一人考えていなかったので、かれらは驚きそして感動した。

「ベルトコンベヤー輸送ラインを設ける区間が 14 キロメートルを越えるでしょうから、一度にはやれないでしょう。だから第１段階としてまず５キロメートル区間に設け、つぎの段階で残りの区間を完成すべきです」

金正日同志は翌年４月中旬までを第１段階として、選鉱場から中間堆積場までを、つぎの段階ではそこから深部までの輸送ラインを完成するよう具体的に語った。幹部たちは目の前が明るくなったような思いがした。自分たちが考えたのはせいぜい電車と鉱車の台数を増やすことで、それは鉱山の１、２年先を見越したものにすぎなかった。ところが金正日同志は、非凡な英知で生産上の最大のネックをとらえ、大胆な打開策を明示したのである。金正日同志の思索には限界がなかった。

その後、剣徳鉱山では大変革が起きた。今日、剣徳鉱山を訪ねる人たちは、山の中腹を横切る大型ベルトコンベヤーによって10 数キロ先の切羽から従来の何倍もの鉱石が運ばれてくる光景を見ることができるようになった。

魚雷艇の上で

1975 年 10 月中旬のある日、東海上を風が吹き荒れ、波は高かった。ところがそんな日に、東海岸の一海軍部隊を訪れた金正日同志は、海兵と一緒に艇に乗って沖へ出てみようと言った。

困惑した指揮官は、波が荒いので沖へ出るのは困難だと答えた。

「わたしは海軍の艦艇に乗るのをたいへん好んでいます。きょうは波が高くて艇に乗るのは困難だというが、波の荒いときに乗った方がいいのです。海兵の舞台は海です。かれらの生活を知るには海に出るにかぎります。心配しないで出航命令を下しなさい」

豪快に笑ってこう言った金正日同志を旗艇に乗せて、魚雷艇

隊はいっせいに波の荒い沖へ向かった。

「どうです。海兵は見違えるほど成長しています。…　海兵たちの戦闘準備状態はたいへんよろしい」

波が砕けてしぶきをあげ、大きく揺れ動く甲板に立って、海兵たちの出航動作を見て満足そうにこう言った金正日同志は、ときには海兵たちと話をし、またときには指揮官に海軍兵力を一段と発展させる重要な指針を語りもした。

沖では艇をのみこまんばかりの怒濤がつぎつぎに襲いかかり、甲板をたたいては激しく渦巻いた。幹部たちが船室に入るよう何度も勧めたが、金正日同志は司令塔の取っ手をつかんで甲板に立っていた。

「わたしの心配はせずに、航海をつづけるのです」

金正日同志は、海兵の生活を見たくて海に出たのだ、かれらの本当の生活を見るには、こんな波とたたかうのを見なければならないと言い、指揮官に、編隊に新たな戦闘状況を提示するよう促した。波はますます高くなり、寒風は吹きつのった。逆まく怒濤に艦艇はうなりをあげ、大きく振動した。波に慣れている海兵も体の均衡を保ちがたいほどだった。

金正日同志の衣服はずぶ濡れになった。あわてた指揮官は無線マイクを取って、波の穏やかな沿海に引き返すよう編隊に命じた。各艇は航路を変えた。

艇が不意にコースを変更したので、金正日同志は、どうして目標に向かわずに進路を変えるのか、どうして速力が落ちるのかとたずねた。

指揮官は言葉につまった。金正日同志は、海兵は波濤を避けて航海をしてはならない、きみたちはわたしのためにそうしてい

るようだが、それではいけない、わたしは勇敢な海兵の航海術を見たくて艇に乗ったのだと言い、それでもためらう指揮官の肩をたたき、海兵は波を恐れてはいけない、波を恐れるような海兵は広い祖国の海を守ることができない、海を守る兵士の重要な品格の一つは、ほかでもなく胆力を養うことだ、最初に定めた状況にもとづいて航海をつづけるのだと言った。

指揮官はもう一度無線マイクを取り上げた。ところが命令を受けた各魚雷艇は、指揮官の気持ちを察したのか、舵をまわそうとせず金正日同志が乗った旗艇を囲んでその場に停船した。ひたすら金正日同志の安全を願う海兵の熱い真情が感じられる光景だった。

甲板に立ってそんな状況を見ていた金正日同志は力をこめて言った。

「いま一度、命令を下すのです。最初に設定した状況にもとづいて航海するよう命ずるのです」

金正日同志の姿を仰ぎみながら、指揮官は各編隊に命令した。航路を変えた魚雷艇はうなりをあげながら波濤のなかを突進した。

双眼鏡で、矢のように走る編隊の姿をたのもしそうに見ていた金正日同志は、じつに勇敢で大胆な海兵たちだ、祖国の海はあのような勇猛な兵士を求めている、と言った。

波は相変わらず荒れていたが、金正日同志は司令塔の取っ手をつかんだまま、甲板を離れようとしなかった。

魚雷艇は指示された航路を疾走した。逆まく怒濤も勇敢な海兵の意思と胆力をくじくことができなかった。

金正日同志の豪胆な声が波の音を圧して響いた。

「りっぱです。あのような勇敢な海兵がいるから、祖国の海

の守りはかたいのです」

胸に熱いものがこみあげた指揮官は心に叫んだ。

(そうではありません。かれらのような勇ましい海兵を育てる鋼鉄の統帥者、軍事の英才である金正日同志がおられるからこそ、海の守りはかたいのです)

10　倍

1984 年 6 月 21 日、金正日同志はシリカリチート煉瓦の見本展示場を視察した。その煉瓦は金正日同志の指示で、わが国ではじめて生産された建材であった。

灰白色のシリカリチート煉瓦に手をふれたり、たたいてみたりして金正日同志は満足そうに言った。

「シリカリチート煉瓦に興味があります。シリカリチート煉瓦は面がととのっていてきれいだから、それで家を建てれば、外壁を塗ったり、塗装材を使ったりすることがなく、煉瓦を積むとき接触部位だけを処理すればよいでしょう」

金正日同志は、シリカリチート煉瓦の長所を指摘し、酸化鉄を適切に配合すればいろいろな色の煉瓦が作れるから、建物の色彩の調和がとれる、また煉瓦がかたいので建築のさい壁に鉄筋を使わなくても 15 階建ての高層住宅も建設できる、だからわが国に豊富な砂と生石灰を配合して作るシリカリチート煉瓦の生産を奨励すべきだ、と強調した。

煉瓦の見本を見たあと、金正日同志は、シリカリチート煉瓦工場の規模について意見を求めた。一人の幹部が自信ありげに進み出た。

「年産１億枚程度の規模で建設すればいいと思います」
他の幹部たちも「それくらいならたいしたものです」と言いそえた。
すでにこの問題の討議を重ねていたかれらは、思いきって年産能力を 1 億枚にすることに合意していた。シリカリチート煉瓦 1 枚は普通の煉瓦 6 枚に相当するので、結局年産６億枚の煉瓦工場を建設するのと同じことになるのだから、たいしたものだと考えたのである。
かれらの意見を聞いて考えこむ金正日同志を人びとは緊張して見つめた。規模が大きすぎるのでは…。
「シリカリチート煉瓦だけで建物を建てるには、１億枚程度ではとても間にあいません。だから煉瓦工場を大きく建てなければなりません。どうせ建てるのなら規模を大きくしなければなりません。… 年産 1 億枚ほどの小規模な工場を建てて、あとで後悔するようなことをしないで、はじめから大きく建てるのがよいでしょう」
こう言われてかれらは、自分たちの計画がいかにみみっちいものだったかを悟った。
その後、かれらは金正日同志の指摘を考慮して煉瓦工場の設計をはじめたが、そのさい工場の規模を慎重に討議しなおした。
「これまでわれわれは多くの近代的工場を建設したが、いつも金正日同志の期待にそうよう大胆に設計することができず、設計をしなおしたものです。人民に間数の多いりっぱな住宅をと願う金正日同志の雄大な構想にもとづいて工場を思いきって大きく設計しましょう。わたしは年産５億枚能力の工場を建てることを提案します」

かれらの一人が自分なりに大胆な意見を出した。しばらく沈黙が流れた。あまり大きすぎるのでは、とためらう者もいた。

「5億枚だと普通の煉瓦を年間30億枚生産する工場の建設を意味します。大胆な目標です。やってみましょう」

いろいろな意見が出されたが、結局5億枚に落ちついて金正日同志に報告された。

ある日、金正日同志はこの問題と関連して幹部たちを呼んだ。かれらは生産能力についてはもう気をつかわなくてもよいだろうと思った。

ところが金正日同志は意味ありげにほほえみ、5 億枚能力の工場では人民の住宅問題を十分に解決できないと言った。かれらは驚いて金正日同志を見つめた。そしてまだその意にそえなかったのかと自省した。

「せっかくシリカリチート煉瓦工場を建てるのだから、5 億枚能力ではなく 10.億枚能力にすべきです」

シリカリチート煉瓦生産条件が十分にととのっている安州(アンジュ)地区に5億枚、咸興(ハムフン)地区に2億5,000万枚、枇峴(ピヒョン)地区に2億5,000万枚規模の工場を至急建設し、一刻も早く人民のためのりっぱな住宅を建設しようと強調した。

(ああ、いつになったら金正日同志の胆力に見習えるだろうか)

幹部たちは金正日同志を仰ぎ見ながら、その大きな胆力に感嘆した。

こうして原案の10倍の生産能力をもつ大シリカリチート煉瓦工場がりっぱに建設された。

つねに足りない時間

金正日同志は、自分にはふだんもっとも不足しているものが一つある。それは時間だとつねづね言っている。想像を絶する活動量をかかえ、時間が無制限に要求されるのである。

1979 年 10 月中旬のある日、朝早くから黄海(ファンヘ)北道一帯を現地指導した金正日同志は、正午近くまで一度も休めなかった。随員が休息を勧めると、諸君も疲れただろうが時間が惜しい、少し我慢することにしよう、黄州(ファンジュ)川まで行けばつり場もあるだろうから、そこで休めばいい、と言った。

やがて一行は黄州川のほとりに着いた。車をおり川辺の低い土手に立った金正日同志は感慨深げにあたりを見まわしてほほえんだ。

「見違えるようになりました」

ちょうどそこへ、地元の党幹部たちが出迎えにきた。金正日同志はかれらに、この一帯の全般的な営農問題とくにとり入れの状況を具体的にたずねた。話はすぐには終わりそうになかった。せっかくの休息時間に…と随員たちはいらいらした。

「どうしたのです。早く休むのです」

こう言われても随員たちは自分たちだけ休息するのがはばかれてもじもじした。金正日同志は、革命の時代に生きるには活動を精力的にする一方、休息も積極的にしなければいけない、あの水辺で休んでいれば自分もすぐに行くと言った。随員たちはやむなく水際へおりていった。

やがて、そこではあちこちで歓声があがった。魚がつぎつぎに

つれるのである。こうしてかなりの時間が流れた。随員たちは思い出したように土手を見あげた。金正日同志はなおも当地の幹部たちと熱心に話をつづけている。かれらは身のちぢまる思いがした。土地の党幹部たちも最初は恐縮して、いまは休息していただき、つぎの目的地で活動報告をつづけたいと言った。金正日同志は水際にちらっと目をやり、かれらがそばにいると自分の気持ちが安まらないし、みなさんも気がねをするだろうと思ってかれらを遠ざけたのだから、気にしないで話したいことはみなここで話せばよい、つぎの目的地でも時間に追われるのは同じことだし、そこはみなさんの担当地域ではないのだから、わざわざそこまで行くことはない、と言って格式抜きで話をつづけた。

かなり時間がたって談話を終えた金正日同志は、水際へおりていった。

「魚はどれほどつれましたか」

誰かが自分たちだけ休息して申しわけないと言うと、金正日同志は微笑した。

「休息は特別なものじゃありません。みなさんはつりでいくらかでも楽しい時間を送ったのだから休息をしたことになるし、わたしは当地の人たちと話したいと思ったことがかない、それだけ荷が軽くなったのですから休息したのと変わりありません。だからきょうここでの休息は満点です」

金正日同志はつづけて、きょうは日程外のことで時間を遅らせてしまった、捕った魚は村の子どもたちに与えることにしてここの人たちに預け、早く遅れた時間を取りもどそうと言った。

黄州川のほとりで長時間を費やしたため、現地指導はそれだけ遅くなり、平壌（ピョンヤン）の執務室へ帰ったのは翌日の夜もかなり更け

てからだった。
　随員たちは、もう遅いからゆっくり休んで 2 日間の疲労をいやしてもらいたいと念じながら、それぞれ事務室にもどった。ところがそのとき、随員の一人に電話が入った。前日の朝、部署の活動と関連して結論を得るために提出した書類を持ち帰るようにという金正日同志の指示だった。この 2 日間わずかの休息もとらずに現地指導をつづけ、たったいま帰ったばかりなのに、いつその書類に目を通したのだろうかといぶかりながら執務室へ行くと、金正日同志は、明朝にしようかと思ったが、そうすれば朝会に間にあわないだろうと思って呼んだと言って、机のカバンを開いた。それは現地指導中も夜遅く帰宅するときもつねに持ち歩くカバンだった。だからそれは他の多くの書類とともに現地指導の途上、車内で目を通したに違いなかった。かれはそんな負担をかけたことに胸のうずきを覚えた。
　金正日同志は、部署で仕事の手配りをするのは明朝だから、今夜は早く帰ってゆっくり休むようにと言った。執務室を出ると、そこには顔なじみの幹部たちが何人か待機していた。かれらも書類を受け取りにきたのだろう。
　このように金正日同志は現地指導から帰っても執務室に残って夜遅くまで仕事を続けたのである。

時間を立体的に

　非凡な指導芸術を身につけている金正日同志は、さまざまな仕事を同時に、立体的に処理している。短い時間に多くのことを処理するそのなみなみならぬ英知と精力については、身近の人た

ちが一致して認めていることである。
　つぎにある幹部の回想を引用してみよう。

　わたしはその方の執務室をたびたび訪ねている。そのたびに各種の建議書、対策案、大会文書、資料通報、講演草稿、情勢報告、社説、論説、試作品、各種の教材や建築物図案…などが机の上におかれているのを見た。ほかにも音楽作品録音テープ、テレビ録画テープなどがテーブル上に所狭しとおかれている。…
　ある日、呼ばれて執務室へ行くと、金正日同志は書類に目を通しながら闊達な筆致で手を加えていた。
　壁際のテープレコーダーからはある芸術団体の新作の歌謡が流れていた。そこへ電話が入った。某地方からの長距離電話だった。レコーダーの音を小さくして受話器を取った金正日同志は、ただちに提起された問題の本質をとらえ、結論を与えた。このように一時にいろいろのことが処理されているのである。
　わたしはその多忙な様子を見て、仕事の邪魔になってはと、一段落つくまで外で待とうと考えた。
　ところが張りのある太い声がわたしの歩みを止めた。
　「この前与えた課題はどうなりました」
　いま見ている書類の処理が終わるまで待たせていただきたいと答えると、微笑して、早く話すようにと言う。
　わたしが課題の遂行状況を話すと、ときには欠点を補い、ときにはうなずいて別の課題をくれるのであった。その間録音テープの歌謡が終わると、すぐ関係幹部に電話をかけ、歌謡の長所と欠点を専門用語で話したあと、つぎの書類を開きながら、わたしが課題を遂行するさいにありうる隘路や克服方途を説明するので

ある。

こうした立体的な仕事ぶりはすぐれた芸術作品のように調和し、思索と問題処理の手順がいささかの狂いもなく進行しているのである。

なんとも驚くべき光景であった。普通の人なら、一時に一つの問題を考えたり処理したりするものだが、いくつもの複雑な問題を同時に考え、あるいは処理しているのである。…

実に偉大な方である。わたしは大きな感動につつまれながら超人的な思考と精力をもって仕事を進めるその英姿に見入っていた。

文章というものは一度に 1 行ずつ読むものだが、金正日同志は一度に 3 行、4 行と読みくだすのだから、その非凡な思考力と精力は世の天才たちをも驚かさずにはおかないであろう。

わたしはそうした仕事ぶりに感嘆しながらも、それでは疲労もたいへんなものだと、気づかわしげに言うと、金正日同志は笑った。

「もちろん多くの書類を見るのは生易しいことではありません。しかし諸所からくる書類をその日のうちに見ないと、定時運行をしている革命の機関車が一時停車しかねません。… わたしは書類を見るのを好みます。もちろんときには疲れもします。けれども処理すべきことが多いので、疲労を我慢して書類を読み、録音を聞き、ビデオを見るのです。そうすればなにかをしたように思えます。じゃ、来たついでにわたしと一緒にビデオを見ましょう」

ビデオにはある専門芸術団のユニークな作品が写し出された。

金正日同志はそれを見終えると、関係幹部に作品の修正方向

やある俳優の技量を高めるための助言をした。そして、いつ見たのか新しい書類に簡単な意見を書き入れた。

わたしは以前から読書熱心な人を少なからず見てきたが、そのように立体的な思考力をもって、驚くほど早く読み進む人を知らない。どうしてそんなに早く読めるのかとたずねると、こういう答えが返ってきた。

「提起された書類を残らず見るにははやく読むしかありません。それで書類を見るときは精力を最大限につぎこむのです。…絶対時間は限られており、読むべき本には限りがありません。だからわたしは限られた時間に本を多く読む方を選びました。わたしはいまも時間が足りません。時間が多ければどんなにいいでしょうか。わたしがいつも言っていることですが、1 日が 24 時間にすぎないのがなんとも残念です」

2　人民性

遊戯場の最初の「お客」

大城山（テソン）遊園地の一角に近代的な遊戯場ができあがったと聞いて、金正日同志は現地へ出かけた。1977 年 10 月 2 日の夕方だった。

最初の試運転をする日のことで、関係者たちは大きな喜びにつつまれた。

案内を受け、広大な谷間にある総合遊戯場の全景を感慨深げに見渡していた金正日同志は、ジェットコースター場へ行き、そ

の説明を聞いたあと、随員たちに一緒に乗ってみようと言った。そして危険だという制止をおしてコースターに乗った。随員たちもためらいがちにあとにつづいた。空高くあがっては矢のように走りくだるジェットコースターに乗るのはもちろん、見るのもはじめてだから、しりごみしないでいられなかったのである。

やがて 30 メートルの高さに引きあげられたジェットコースターは滑るように下降し、慣性で大きな円を画いたかと思うと、さまざまな傾斜をのぼりおりしながら風を切って走った。

終着点でコースターからおりた金正日同志は、慎重な面持ちで言った。

「ジェットコースターの運行も飛行機の運行と同様厳格におこなうべきです。飛行機の場合、旅客がいくらせかしても、操縦士がだめだと言ったら離陸できません。ジェットコースターを運行する場合も緊張をゆるめないことです。さもないと大事故を起こしかねません」

そして、しばらくなにかを考えたあと、線路の右側カーブを指さした。

「あの急カーブがもっとも危険です。あそこで大きな音がしました」

技術者たちも気づかなかった危険個所を 1 回の試乗で瞬時に発見し、安全対策を立てるようにと注意されたのである。短い言葉だったが、そこにはジェットコースターに乗る大勢の人たちへの思いがこもっていた。

金正日同志は遊戯機具に乗ってみたり作動させてみたりしながら、各施設の運転法や安全状態をいちいち確かめた。そして、回転速度の大きい遊戯機具は年寄りや子どもたちに目まいを起こ

させかねないから､回転速度と時間を適宜調節すべきだと注意し、各機具の問題点を指摘した。

時間がたち日が暮れていくと、冷たい秋風が吹きはじめた。随員たちは気をもみ、残りの遊戯機具は選択して見てはと進言した。しかし金正日同志は、われわれが確認せずにどうして安心して子どもたちに乗らせることができるか、たびたび出てこられるのでもないから､少し遅くなってもみな見ることにしようと言い、疲れた様子もなく公園の道を前に立って歩いた。

金正日同志がマッド・マウスに乗ろうとしたとき、随員が、もう暗くて危険だから、これにだけは乗らないようにとおしとどめた。それは大きなスピードで勾配や急カーブを走るので、危険このうえないと思えた。

しかし、人民が乗って楽しむ遊戯機具にどうしてわたしだけが乗れないのかと言って乗車し、みんなの困った表情を見ると豪快に笑って、むしろこんな暗いときに乗れば恐怖を覚えなくてよいと言った。

マッド・マウスは発車した。幹部たちは手に汗を握って傾斜の急なレールの上を走るマッド・マウスの動きに目を吸いつけられた。

マッド・マウスからおりた金正日同志は、振動が大きい感じはするが青年に喜ばれるだろう、事故を未然に防ぐために遊戯機具の利用秩序を厳守すべきだと強調した。

すっかり日が暮れ、風は冷たかったが、金正日同志は幹部たちと一緒にモノレールにまで乗ってみてから遊戯場をあとにした。

りっぱな遊戯場を作るよう配慮し、そこにわずかの欠点もあってはといちいち注意を与え、人民が乗る前に最初の「お客」に

なって試乗し、安全であることを確かめてはじめて心を安んずるその温情に、人びとはひとしお感動した。

幸福の家

新築のレストラン清流館（チョンリュ）が店開きの準備を急いでいた 1981 年 11 月 30 日、清流館を視察した金正日同志は、海上の大きな客船を思わせるその外観を満足そうに眺めたあと、内部の家族用食事室にまず案内された。清流館には家族づれで食事をする部屋もなければならないとして、設計図に標識をつけておいたルームだった。

「食卓の造りがいい。今度はじめて朝鮮風の食卓をおいたわけですね」

ほほえんでこう言った金正日同志は、漆塗りの螺鈿細工の食卓を腰をかがめて見たり、1 歩後ろにさがって眺めたりしてから、食卓がちょっと高くないか、とたずねた。誰も答える者がなかったので、「食卓が高いかどうか、部屋へあがり、前へ座ってみることです」と、随員の一人に言った。

かれが食卓の前に座って両腕をテーブルに乗せたり、いろいろ動作をしてみたりして、別に高い感じはしないと言った。ほかの人たちもかれの動きを見てそれくらいならほどよい高さだと言った。けれども金正日同志は考え深そうに食卓の高さをあれこれの角度からおしはかって、軽くかぶりを振った。

人びとが腑に落ちかねていると、この部屋は家族づれで利用するところだ、家族が食卓を囲んで食事を楽しもうというとき、子どもたちが不便な思いをすれば、親の気持ちも落ち着かないだ

ろうから、食卓を子どもたちにもあうよう少し低めた方がよいと言った。

家族用の食卓。背の高い父母だけでなく、いろいろな背丈の子どもたちのことを考えあわせると、おとなには適度でも、子どもたちには必ずしも便利だとは言えない。… 人びとは、客にいささかの不便もかけてはいけないと、深い思いやりをこめて語る金正日同志の配慮に胸を熱くした。

金正日同志のそうした思いやりは清流館のどの部屋にも深くこもっている。

2階のホールにあがり、休憩室へ入ったとき、金正日同志は、レストランが店開きをしたら、お客を日に何人ほどさばけるか、1回の食事時間は何分ほどに見積もっているかとたずねた。

「日に1万5,000名、食事時間は40分と見ています」

こう答えながらも随員は、食事時間の見積もりが長すぎたのではと思った。清流館の竣工後、運営問題を討議したさい、食事時間の問題が慎重に論議された。30 分なら十分だという者もいれば、食事を楽しむには40分は必要だろうと言う意見も出され、結局、時間を大幅にとって 40 分に落ち着いたのであった。かれは、やはり 40 分は長すぎるのではと、質問に答えながらも気をもんだのである。

「40分では短すぎるようです」

みんなの意外そうな表情を見て、金正日同志は微笑し、珍客の訪問を受けたり、親友に会って清流館にやってくる人もいるだろうに、かれらがただ食事をとるだけで別れるだろうか、談笑などで印象深いひとときをすごそうとするだろうが、そんなときは1時間半でも短いと思うが、と言い、こう強調した。

「千席食堂の運営計画を正確に立てることです」

随員たちは、清流館をたんに料理を売るだけの一般の食堂と同じようにみなしていた自分たちの考えがいかに狭いものだったかと思い返し、清流館はただの営業が目的ではなく、人びとにより明るい文化生活の場を提供する幸福の家であるとする金正日同志の深い人民愛に大きな感動を覚えた。

移設された鉄道

オンダル泉(ちんまりした泉)とは、夏でも歯がしびれるほど冷たく感じるさわやかな泉をさして言う言葉である。

ところが普天(ポチョン)郡内曲(ネゴク)村に風変わりなオンダル泉があった。それは手を浸けるのがやっとというほど熱く、夏はもとより冬も湯気をもうもうと立てている温泉だった。

深い山あいにあり、それも雑草におおわれていたので知る人が少なく、泉はせいぜい村の女たちの冬場の洗濯場として利用されているにすぎなかった。そして、いつのころだったか、村人たちがその付近に温泉浴場を作りはしたが、とても見すぼらしいものだった。

1976年7月のある日、金正日同志は白頭(ペクトゥ)山地区を現地指導中、道の幹部に言った。

「内曲温泉に寄ってみましょう。革命戦跡地に一つしかない温泉ですから、主席の志にそってりっぱに建設するのです」

かれらは困惑した。内曲温泉の付近には休息場がなく、浴場といってもただの泉と変わらぬ粗末な造りだったので、案内することがはばかれたのである。それで、またの機会にしてはと進言

したが、内曲温泉は各種の疾病治療に有効な成分を含むすぐれた温泉だから、そこに療養所をりっぱに建てて、両江(リャンガン)道民の療養はもとより革命戦跡地の踏査者たちが帰途に休息し、温泉浴もするようにすればよいではないか、と言う。

車が内曲村の温泉場に着くと、金正日同志はこんこんと湧く温泉に手を浸けて湯加減をみたりあたりを見まわしたりしたあと、近代的療養所の建設や休養施設の造成方途を具体的に語った。

このとき、鋭い汽笛の音をあげながら丸木を満載した林鉄列車が村のなかほどを縫って走った。静かな山村はたちまち騒々しい轟音につつまれた。

列車が遠くの山角をまわってみえなくなるまでそれに目を向けていた金正日同志は顔をくもらせ、療養所の周辺は静かでなければならない、村のなかを汽車が通るようでは困ると言った。

「当地に泉の湯を引いて多くの浴場を建てるには、林鉄が妨げとなります。… 林鉄をほかへ移せば浴場をたくさん作れます。可能なら林鉄を移設すべきです」

こう言ってゆっくり山裾を歩きはじめた金正日同志は、鉄道を移設するにはトンネルを掘るほかないが、そのためにはどれほどの手間がかかるだろうかとたずね、随員たちが返答に窮していると、山の大きさを目測し、400 ないし 500 メートルは掘らなければならないだろうが、人民の健康を守ることだから、思い切って鉄道を移設しようと言い、浴場の建設方途から療養所の造りにいたるまで具体的な対策を講じ、そのあとこう言った。

「内曲村でジャガイモ餅やジャガイモ冷麺などの特産品を多く作って売るべきです。そして、入浴後、人びとがジャガイモ餅やジャガイモ冷麺、両江道ビール、両江酒のような特産品を味わ

うようにするのです」
内曲温泉地区は金正日同志の構想どおりりっぱに作られ、鉄道も移設された。こうして、この栄光の地を訪れる人は誰もが胸あたたまる思いをしているのである。

食品運搬車問題

1978 年 8 月中旬のある深夜。12 時すぎまで懸案の問題処理に忙殺されていた平壌市党委員会の責任幹部に、金正日同志から電話が入った。時間が時間だけに緊要な問題だろうと思いながら姿勢を正してあいさつをした。
「主席から贈られた食品運搬車 20 台を配分したいのですが、どの託児所にすればよいか、プランを立ててください」
長くない指示だったが、かれは胸が熱くなるのを覚えた。食品運搬車を配分するだけのことなら、この深夜に、それも金正日同志がじかに電話をくれなくてもよかったろうが、そこにはそれだけの理由があった。
かれは数日前、金正日同志に会ったさい、市内の一部の託児所用供給所が食品運搬車の不足を訴えていることを話した。しかし金正日同志がたまたまある緊要事に忙殺されていたときだったので、かれはいらぬ心配をかけたと後悔し、はたしてそれを心にとめてくれただろうかと危惧もした。
そうして何日かすぎると、かれ自身も他の重要事にかまけて、食品運搬車の問題を忘れてしまった。
ところが、金正日同志はその多忙ななかでちょっと耳にはさんだことを忘れず、20 台もの食品運搬車を用意し、配分計画を

求めたのである。

感動したかれは、翌日、食品運搬車の配分案を作成して提出した。

数日後、金正日同志は市党委員会に自筆の文書を送った。

「(略)託児所、幼稚園用の車が他に流用されないよう十分対策を立ててから使用すること」

これは、市内で託児所用食品運搬車が流用されているのを目撃したうえで指摘した注意事項であった。

その細かい配慮、とりわけ保護が必要な柔弱な幼児たちへの深い思いやりに、幹部たちは自らをかえりみた。

金正日同志のすぐれた風格は幹部たちのかがみである。

細心の心づかい

1975 年 8 月 17 日午後、金正日同志は新しく建設された楽園(ラクウォン)通りの住宅を視察した。

第 4 号棟 2 階 4 号住居の広く明るい寄りつきに立った金正日同志は、「３DK ですね」と満足そうに言い、各部屋を見まわったあと、これらの家具はただのサンプルか、それとも各家庭にすべてゆきわたるものかと質問した。

台所では、台所用品の一つ一つを注意深く見て、食器戸だなや冷蔵庫が申し分ない、政務院付属家具工場では今後も家具を大量生産して市民の需要をみたし、楽園通りの住宅には既製品のなかから最良のものを選んで備えつけ、テレビや冷蔵庫、洗濯機などの家具一式は月賦払いで供給することにし、支払い期間を住民に有利に定めた。

居間にもどると、オンドル部屋には高い机より座机をおき、その上に朝鮮風の本立てを備えるとよい、食卓は座卓にし、ベッドは足の長さを 20 センチほどにして柔らかいマットをおけば住民に喜ばれるだろうと言った。

このように、1 所帯分の住居をつぶさにみながらもそれだけではものたらず、いま一つの住居へ入って各部屋をみてまわり、衣装用押し入れや下駄箱もりっぱに作り、水道栓ももっとスマートなものと取り替えるのがよかろうと言った。

その間かなり時間がたったので、随員がつぎのコースへ案内しようとしたが、金正日同志は折角来たのだから３DK の住居をもう一つ見ようと言って、向かいの住居へ入った。そこでは、このような構造の住居にはベッドや机をおくのが似つかわしいから、楽園通りの３DK 住居にはベッドと机を備えるようにし、衣装だんすは壁面に取りつけることにすれば簡単に作れるので、木材が節約できるうえ実用的でもあると言った。台所では内部を注意深く見てから、食器戸だなは 20 センチほどもっと高目に備えつけ、日常使う食器類は下段に、まれに使うものは上段において客の接待用などに使うとよいと言った。

そのうち日が西に傾いたので、少し休んでからつぎのコースへ向かってはと勧められたが、人民の住居を見るのは楽しいことだ、もう一つ見ることにしようと言ってつぎの住居へ入った。そして、ここに備えてある家具はただのサンプルであってはいけない、テレビはない所帯にだけ供給し、食卓などの家具はすべて新品を備えるようにして、楽園通りへの引っ越しでは中古品を待ちこまないようにしようと、笑って言った。

そのあと 1 階の玄関へおりて、新聞、雑誌は全家庭に入るの

だから、各玄関に新聞入れを備えるようにしようと言ってから、みんなの期待にそむいて、もう 1 軒見れば安心できるとして、つぎの棟へ向かった。

(人民に提供するものにはわずかのきずがあってもならないという思いやり、そのきめの細かさには驚くほかない)

随員たちはいまさらのように感じ入り、自分たちのぞんざいな仕事ぶりを反省した。

つぎの棟の住居に入って部屋の様子を見たあと台所に立った金正日同志は、食器戸だながよくできていると言って、戸を開けたてしたり冷蔵庫にさわったりしながら、使用上不便はないか、不足しているものはないか、といろいろ気づかい、部屋にもどると、ベッドに腰をおろして満足そうに言った。

「すまいがこれくらいなら国際級です」

しばらくして化粧室をのぞいた金正日同志は、人民生活の文明度は化粧室の清潔さによって評価される、いま一部の人たちは以前の貧しい生活と比較して、あまりレベルが高くなくてもりっぱだと考えているが、それではいけないとたしなめた。

住居を見終わった金正日同志は、微笑して、こんど引っ越してくる人たちは、布団と食器類だけを持ってくればよい、主席の配慮はほんとうに大きい、この住居には空身で移ってきても暮らしに困らないだろうと言った。

随員たちは、もう日が暮れたからそれくらいにしてはと進言した。金正日同志はまだなにかが不足しているかのように考えこみ、やがて、家具類をりっぱに作ること、いまここにあるものより質が劣れば合格させないから、サンプルどおりの家具を各家庭に配分すること、引っ越しが終わったあと来てみて合、不合格を

決めるが、そのときは随意に住宅を見てまわる、党中央は楽園通りの住宅建設を通してみなさんの党性を点検する、と強調した。

以上は楽園通りにかぎった話ではない。その後に建設された蒼光（チャンクァン）通り、紋繍（ムンス）通り、光復（クァンボク）通りなどの住宅にもまったく同じ配慮がめぐらされたのである。今日朝鮮人民が住んでいる住居のどの部屋、どの家具をも決して無関心に見てはならない。

鉱夫たちの出退勤にも

1984 年 5 月 16 日、国の北方、茂山（ムサン）鉱山を訪れた金正日同志は、鉄山（チョルサン）峰の険しい道を徒歩であがり、茂山鉱山の採掘展望を語ったり、採掘条件その他の隘路の克服対策を立てたりしながら露天掘り場を視察した。金正日同志は採鉱場の下の谷間から鉄山峰の頂までつづく曲がりくねった小道に視線を向けた。

「労働者たちは作業場へ徒歩通勤するのですか」

険しい山道を行き来する鉱夫たちの苦労を思いやっての質問だろうと気づいて、随員の一人が答えた。

「インクライン用レールを取り除いてから、労働者たちはあの道を歩いて作業に行っています」

金正日同志は、労働者にそんな苦労をさせてもよいのか、ときびしく言った。鉱山の幹部たちは、金正日同志が一目でそれと知り胸を痛めたことにたいし、鉱山の主人である自分たちが無関心でいたことを恥じ、頭をあげることができなかった。

以前、鉄山峰の頂へ貨物を運ぶときはインクラインを使っていたので労働者たちもそれを利用していたのだが、採掘階段が次第に低くなり、貨物の運搬にインクラインを使う必要がなくなる

と、レールを取り払ったのだった。貨物だけを考え、労働者の出退勤には関心がなかったから、マンカーの新設は計画されていなかったのである。

金正日同志はその場で、労働者の出退勤用マンカーとバスを開通させる対策を立てた。そして、労働者の給養改善問題にふれ、茂山地区ではマクワウリやスイカがよくできるはずだがと言った。

人びとは驚いた。まだ春だというのにマクワウリやスイカの話が持ち出されたうえ、こんな北国でそれらがよくできると言われて、わが耳を疑ったのである。

かれらの気持ちを察したのか、金正日同志は、以前は茂山マクワウリと会寧（ヘリョン）マクワウリが有名だった、労働者が集中している地区にマクワウリとスイカを多く植えて、夏場に供給するとよいだろうと言った。

鉱山の幹部たちは、労働者の生活向上に尽くすべき自分たちさえ考え及ばなかったことをねんごろに指摘され、いまさらのように頭のさがる思いがした。

金正日同志はそのほかにも、平壌から遠く離れているこの山地でもテレビの映像は鮮明だろうか、飲料水は上質か、新婚の除隊軍人に住宅はゆきわたったか、と生活上の問題をつぶさに確かめ、懸案の問題には解決策を講じた。

鉱山の実態や鉱夫たちの生活のすみずみにまで関心を向け、人民経済の主原料である鉄鉱石を掘る労働者たちの生活向上に意を尽くす金正日同志の深い思いやりに、みんな胸を打たれた。

約　束

街や遊園地に野バラやバラの花が咲き誇っていた 1987 年 5 月のある日曜日、多忙な時間を割いて平壌市内を視察していた金正日同志は、完成間近い北塞(プクセ)通り(現在の安商宅(アンサンテク)通り)の住宅建設場を訪れた。

低い粗末な平屋がひしめきあっていたのがついきのうのことのようだったが、早くも大型高層住宅群が競い立っていた。形式も大きさもさまざまで、どれもが美しく巨大で各自特色を誇っていた。

「北塞通りを全般的にりっぱに形成しました。建物の配置がよく、形式もすぐれています」

金正日同志は満足げにこう言って、建設者たちをたたえた。そして、4,000 所帯を越える街をひと巡りしたあと、4 月 15 日の祝日までに完成して住民の新居入りを終えようとしたが、そうできなかったと残念そうに言った。

「北塞通りの建設で立ち退きを余儀なくされた住民が何年か同居生活をし、いろいろと不便な思いをしていることでしょう。北塞通りの住民が立ち退くさい、新住宅が出来次第入居させると約束したのですから、早く北塞通りの住宅に入居させなければ、党が信用を失いかねません」

金正日同志はうなだれている随員たちに向かって、「ここに建てられた住宅はわたしが北塞洞の住民と約束したものです。ここの住宅は誰も勝手に処理してはいけません」と強調した。住宅が完成すれば、一時立ち退いた住民を度外視して他の人たちを入居

させるようなことがあってはと、事前に北塞通り新住宅の入居証を発給する措置がとられていたのだった。それは党が人民におこなった約束であった。だから、なにかの手違いで元の住民が一人でも新居入りできなかったとしたら、約束が反故になる。

金正日同志は同居生活をしている立ち退き住民の不便を思いやり、できるだけ早く建設を終えてかれらを入居させるようにと強調した。

随員たちはしばらく前、書斎（ソジェ）洞を立ち退いた住民の境遇を知って、「書斎洞を立ち退くさい入居証を事前に発給された同居生活者たちには約束をたがえず、住宅が出来あがり次第必ず入居させなければなりません」と言った金正日同志の言葉を思い出した。

このように人民の住宅問題に心をわずらわせ、いつだったかは、産業建設が遅延する場合は批判を受けて善後策を講じればよいが、住宅建設が遅れて人民生活に不便をきたしては、かれらにいくら謝っても罪が軽くなるものではないといましめたのである。

「北塞通りの住宅はおよそ 4,000 所帯ですから、10 日あれば引っ越しは完了できます。北塞通りへの入居者たちにそう知らせれば、荷車に家財を積んでも入居を早く終えることでしょう」

この言葉に剛腹な笑い声が含まれてはいたが、人びとはその温情に胸を打たれ、目がしらを熱くした。

北塞通りの住宅建設は急速に進み、ついに新居入りがはじまった。そこには事前に入居証を発給されていた立ち退き住民はもとより、ほかにも大勢の人たちが 3 DK、4 DK のりっぱな住宅に入居した。

この世のいかなる保証も遠く及ばない朝鮮労働党と人民の約束。そのすばらしさを生き生きと見せる引っ越し風景を目のあた

りにして、人びとはいま一度感服した。実にそれは、朝鮮労働党と人民のあいだを信頼と温情が行き交う叙事詩的絵巻であった。

西海閘門建設者にも

　西海(ソヘ)閘門の建設に参加した人民軍各区分隊が工事の準備を急いでいたある日の晩、金正日同志は電話で人民武力省の一責任幹部に、建設場で持ちあがっている問題を知っているかと聞いた。

　かれは深夜に入った電話だけに、工事の基本問題にかんする質問だろうと考え、工事の本格化にあたって特殊作業部隊の新編制問題が討議された、ほかにも一連の重要問題が持ちあがっていると答えた。すると、それらももちろん重要に違いないが、そのことでこの夜中に電話をかけたのではない、という言葉が返ってきた。かれは首をかしげた。

　基本建設上の問題でなければいったいなんだろうか、ついさっきまで閘門建設指揮者たちと突っこんだ討議をしたのだから、ほかに問題のありようがない。…

　「先ほど確かめたところによると、閘門建設に参加した軍人たちが飲料水問題で不便を感じているようです。…　工事も大切ですが、それ以上に大切なのは人間です。基本工事が少し遅れても飲料水問題から先に解決すべきです。飲料水問題が解決したという報告を受ける前に、閘門建設問題にかんする他の報告は受けないことにします」

　金正日同志の言葉に、かれは胸を熱くした。実際、建設現場で飲料水問題が持ちあがっているのを知らないわけではなかったが、もともと飲料水不足の海岸地帯へにわかに大勢の建設者が入

っていったのだから、飲料水に悩まされるのは避けがたいことだった。しかし、自分たちは閘門建設が基本であるだけに、そこへ関心を集中し、飲料水問題はあとにまわしてもやむをえないと考えていた。工事に注意を奪われ、人間を等閑に付していたのである。ところが、金正日同志は先に人間を考えているのであった。

返答に窮していると、引き抜き鋼管が 200 トンあれば上水道を引けるというが、それは大きな問題ではない、チョンリマ製鋼連合企業所に指示したから、早く引き抜き鋼管を受け取って、飲料水問題から先に解決することだと言う。

これは、閘門建設任務を受け持った人民軍部隊の現地展開後、金正日同志から受けた最初の指示であった。

*　　*　　*

うだるような炎天がつづく土用のころ、人民武力省の一責任幹部が緊急にある指示を仰ぐため金正日同志の執務室を訪ねた。

「基本ダム工事はどれほど進みましたか」

金正日同志は建設の進行状況に大きな関心を向けて、こう聞いた。

「けさの日報では、1,000 メートルを突破しています」

金正日同志はそれならかなり速いスピードだと言って喜び、ダムを築く軍人たちの食事はどうしているのかと聞いた。

「日に 3 食とも兵営食堂でとっています」

「兵営食堂ですか」

金正日同志は、いまはまだ距離がさして遠くないから食堂までの往復にさしつかえはないが、距離が遠くなれば不便なことになると心配し、「それでなくても骨が折れるだろうに、毎日食堂

まで歩いて行き来することになれば、兵士たちの苦労が大きいでしょう」と言って、ダムの建設場以外にも食堂から遠く離れた作業場で働く人たちが多いだろうから、どうすれば食堂まで行き来しないで日に 3 食とも温かい食事を出せるか考えてみるようにと言った。まだ暑い夏の日ざかりに早くも寒い冬の食事を心配しているのであった。

その後、幹部たちは討議を重ねたが、兵士たちが四方に散らばって作業している現状で、移動食堂をそんなに多く設けることもならず、対策が立たないまま数か月がすぎた。

朝夕冷気が感じられる初秋のある日、閘門建設場に歓声があがった。金正日同志から贈られた数十台の食事運搬用特殊車が到着したのである。

それは試作品を見せて、あるトラクター工場に作らせた史上例を見ない食事運搬用の特殊車であった。吹雪の荒れる厳冬にも、食事の温度が一定に保てるよう工夫したすぐれた車であった。

工事の実績や勤労の成果よりも人間、建設者を先に考え、かれらの健康や生活のすみずみまで細かく気づかうその愛と信頼は忠誠心の大きな源泉となり、建設者を偉勲へと呼び起こした。

冬のきびしい寒さのなかでも、現場まで特殊車によって運ばれた熱い汁をすする兵士たちの胸に力がわき、熱情がたぎるのは当然であろう。

*　　*　　*

1984 年 9 月のある日、金正日同志は人民武力省の責任幹部にたずねた。

「閘門の竣工が間近いいま、閘門建設者のためになにをどう

すればよいか、考えていることはありませんか」
かれは慎重に考えて答えた。
「閘門竣工式を機に大きく表彰をすればよいと思います」
「表彰ですか、それは当然すべきです。かれらのためならなにを惜しみましょう。わたしの考えていることはそのことではありません。表彰ならそのときにでもやれるではありませんか」
笑ってこう言った金正日同志は、まだ竣工までは間があるが、自分が考えていることはいまから準備しないといけないことだと言った。かれは腑におちず、つぎの言葉を待った。
「閘門建設者のための記念碑を建てようというのです」
平凡な人たちのための記念碑を建てると聞いて、かれは驚いた。
金正日同志は、戦時に勇敢に戦った英雄たちの偉勲を記念碑に刻んで後世に伝えているように、西海閘門建設者の偉勲も記念碑を建立して末長く伝えるべきだ、創作家たちに記念碑形成案を作成するようすでに課題を与えてあるが、ほかにもよい案があれば、かれらに提起するのがよかろうと言った。
西海閘門竣工式の日、人びとは閘門の両方入口の高い門柱に建設者たちの英雄的闘争の有様をかたどった花崗岩像を見て、大きな感動につつまれた。

試作畑

初夏の薫風が若葉の香りを運んでくる 1964 年 6 月のある日曜日。
その年も例年と変わりなく、6 月に入るとアカシアの花がつ

ぼみを開き、濃い香りを漂わせた。
　金正日同志のそば近くで働くある幹部が、この日、久しぶりに邸宅を訪れた。庭園に足を踏み入れたかれは思いがけない光景に驚かされた。普通なら観賞用樹や花木、青い芝が植わっているはずの庭園がなんと経済林地に変わり、花壇は小分けにされた畑になって穀類が育っているのである。そこにはイネ、トウモロコシ、ダイズ、コムギなどの穀類や工芸作物、それに白菜、大根、春菊などの野菜、さらには愛国草(オオハリ草)のような飼料用草まであった。
　畑ごとに作物の名札がついていて、例えばトウモロコシ畑の名札はこうなっていた。

トウモロコシ試作畑(1)
品種　義州(イジュ)×号
播種日　5 月 5 日
坪当たり株数　19
坪当たり施肥料　基肥 3 キロ
追肥 1 キロ

　まるで農業研究所の試験圃場である。目を丸くしてなかへ入ったかれは、畑仕事をしている金正日同志に会った。コムギの裏作にダイズの種をまいていた金正日同志は喜んで、あそこに手鍬(ホミ)があるから一緒に種をまこうと言った。
　思いがけず金正日同志と並んで種まきをする幸運にあずかって喜びは大きかったが、金正日同志がこんな畑仕事までしているので、驚くほかなかった。

金正日同志は、裏作のダイズは葉が小さくつくから密に植えても日光を十分に受けられるから、できるだけ密に植えるようにと、その間隔を教えた。

「これほど密に植えれば、裏作でもヘクタール当たり 2 トンは取れるでしょうね」

かれは種をまきながら言った。金正日同志は慣れたしぐさで種をまきながら、2 トンではなく 3 トンを見越している、そうなれば表作と裏作をあわせて計 6 トン半は可能だろう、と楽しそうに答えた。

かれはあっけにとられた。当時の畑作は 1 毛作を主とし、まれに 2 毛作をする場合も、ヘクタール当たり 4 トンを越えることがなかったからである。

金正日同志はそんなかれを見ると、腰をのばして笑った。そして、自分は主席の意にそって何年かハダカムギと陸稲、ハダカムギとアワ、ハダカムギとダイズなど穀物の組み合わせで 2 毛作を試みているが、表作は 10 月 5 日ごろに、裏作は 6 月 28 日ごろに植えると 6 トン半の水準になった、品種の改良によって収量を高めうるが、それには時間をかけなければならない、7 か年計画目標の穀物 600 万トンを生産する大きなスペアは 2 毛作と密植にある、2 毛作面積を 10 万ヘクタール増やし、密植もすれば 25 万トンの穀物増産が可能である、耕地面積が限られているわが国では、平地で 1 年 2 毛作を、中間地帯では 2 年 3 毛作をし、同時にすべての穀物を密に植える方向に進まなければならない、と力をこめて言った。

穀物生産の要諦を指摘する言葉であった。

かれは、邸宅の庭園を作り変えたこの試作畑がたんに農作物

の生態などを観察し研究するところではなく、朝鮮農業の発展と党のチュチェ農法の根元が作られ、構想される貴重な原種圃場だと知った。

昼　食

1964 年 6 月 12 日の朝、金正日同志は朝鮮地図を前にして、平安（ピョンアン）南道一帯を注意深く眺めた。休みなく現地指導がつづき、その日は平安南道の農村地区へ出かける予定だった。

「きょうはヨルトゥ三千里（サムチョンリ）原へ行ってみるつもりです。昼食はどうしても文徳（ムンドク）郡立石（リプソク）里でとることになりそうです」

随員は、すぐ現地へ知らせて昼食の支度をさせると答えた。

「いや、そうしてはならない。人民に迷惑をかけてはいけません。食事はわたしが用意しておきましたから、忘れずに水筒に水を入れて持っていってください」

かれはやむなく水筒を携帯するだけにした。

一行を乗せた車は平壌郊外を抜け、青々とした田野を縫って走った。そしてヨルトゥ三千里原に入り、粛川（スクチョン）果樹農場と検興（コムフン）協同農場をへて文徳郡にいたった。立石里に着いたのは昼どきだった。

前ぶれもなく訪れた金正日同志を迎えて大喜びした当地の幹部たちは、昼食の支度をしようとせわしく立ちまわった。金正日同志はその一人を呼んだ。

「そんなことをする必要はありません。昼食は用意してきました。部屋を一つ貸してくれればいいのです」

こう強く言われて、やむなく食事の支度はとりやめとなり、

あるこざっぱりした住宅の一間が提供された。

部屋に丸膳がおかれると、持参の弁当と水筒が出された。人びとは驚いた。弁当はなんと握り飯だった。それをみんなに分けると、一人当たりわずか二つほどにしかならない量である。

金正日同志は気さくに膳の前に座ると、かれらに食事を勧め、自分も一つ手に取っておいしそうに食べた。人びとは胸が熱くなった。握り飯のなかにあるおかずもダイコンの千切りとキュウリ漬け、ダイコン漬けだけだった。

その平民的な人柄に感じ入り、人びとはそんな質素な食事をとりながらも、山海の珍味に舌づつみを打つ以上に満足した。

後日、随員は金正日同志に同伴して水豊(スプン)湖へ行ったときにたずねた。

「指導者同志はどうしていつも握り飯ばかりあがるのです。健康にさわるんじゃないでしょうか」

「握り飯がどうしたと言うのです」

かれは自分たちのもどかしい心情を語り、今後それだけはひかえてほしいと重ねて言った。金正日同志は深い思いをこめて答えた。

「わが国の人民すべてがそうでしたが、わたしも祖国解放戦争や戦後復興建設の時期に握り飯を食べました。あのころ、紙につつんだこぶしほどの握り飯をポケットに入れて建設場で働き、昼、草原に座ってみんなと分けあって食べたものです。そのときの味は格別でした。それでいまもときどき握り飯を食べながら苦しかった当時を思い出し、力をつけているのです」

あの困難だった時代を決して忘れまいと、いまも当時のように質素な食事をとり、生活する金正日同志だった。

随員は、今日の幸せに酔ってともすれば以前のことを忘れがちな自分たちを深く反省した。

3　愛と信頼

運命を託したふところ

1985 年 10 月 25 日、ある出版社ではその日の創立 40 周年記念日に、金日成主席と金正日同志を迎えて記念写真を撮った。

ところが社員の一人がその光栄に浴することができなかった。みんなが写真を撮っているあいだ、かれは独り事務室に残り、深刻な思いで自分の半生をかえりみていた。

かれは複雑な家族関係のなかで育ったが、金日成主席と金正日同志の信頼を得て、党の文筆家、博士、助教授に成長した。この大恩に報いるため、ひたすら党と領袖のために時間を惜しみながら一心に働いてきたかれだった。ところが主席と金正日同志を迎えて記念写真を撮るその栄光の場に立つことができなかったのである。どこにも訴えどころがなく、だからといって心に秘めておくにはあまりにもつらいことだった。

帰宅したかれは何事もなかったかのようにふるまった。

ところが記念写真を撮った 3 日目の夕方、家へ帰ったかれは、ぎくりとして立ちすくんだ。

先に帰った二人の娘が新聞を開いてなにか一生懸命に探している。

新聞には例の記念写真が掲載され、娘たちはそこで父親の姿

を探していたのである。
「お父さん、こんなうれしいことがあったのに、どうしてわたしたちには話してくれませんでしたの」
娘たちはこう言い、どのへんに立っているのかとたずねたが、返事ができなかった。
そんな父親の様子から娘たちはすべてを察した。上の娘は父のカバンを受け取りながら涙声で言った。
「お父さんはどうして記念撮影に参加できませんでしたの」
次女はしゃくりあげながら、きょう、新聞を持ってきた友人たちからお祝いを述べられ、お父さんがどこにいるのかとたずねられたが探せなかった、あしたの朝教えてあげると約束したのに、みんなにどう答えたらいいかわからないと、くやしそうに言った。
かれは平気をよそおったが、娘たちに面目がなかった。
その夜はどうにも眠れなかった。悩みというものを知らずに幸福に育った娘たちの心に陰を宿させたと思うと、胸がうずいた。出版社責任幹部の偏狭な態度が党の大衆路線をゆがめ、一人の知識人を苦しめることになったのである。
金正日同志がこのことを知ったのは 11 月 4 日であつた。ことの次第を詳しく調べるよう指示し、夜遅く報告を受けた金正日同志は、あまりのことに心が痛み、その夜は一睡もできなかった。そして、それが党の大衆路線を逸脱した大事件だとして、翌朝、関係部門の幹部協議会を開き、「昨夜、この報告を受けて眠れませんでした」と言って、各階層大衆との活動における深刻な欠点を鋭く分析し、党の大衆路線を貫徹して広範な大衆を党のまわりに結集する綱領的な課題を示した。
「人間を信じなければなりません。信じても口先だけでなく、

心から信じなければなりません」

金正日同志は切々として語った。

金正日同志は、いまこの問題をいくら強調しても、主席を迎えて記念写真を撮る場からはずされたその人の心の傷をいやすことができるだろうか、今後催される大きな記念行事のさい主席と一緒に記念写真を撮り、新聞に大きく載せなければならない、きょうじゅうにかれを訪ねて一部偏狭な人のためにそうなったのだから、決して悪く思わないでくれと伝えるよう指示した。

その後、金正日同志は、全党的に党の大衆路線を徹底的に貫くようはからった。

ついにその日が来た。

1985 年 12 月 25 日、心のときめきを覚えながら例の文筆家は心をはずませて指定の場所へ行った。

撮影場で、かれは最前列の中ほどに案内された。席が間違っているのではと考え、かれは逡巡した。案内した幹部が前夜にあったことを話した。

夜遅く翌日の記念撮影準備状況報告を受けた金正日同志は、かれの立つ位置がどこかとたずね、この前撮影に参加できなかったのだから、最上の位置に立たせようと言って、主席のすぐそばを指定した。そして新聞にはかれの名も一緒に載せようと言ったという。

やがて金正日同志が主席を案内して撮影場に現れた。

主席が熱烈な歓呼に手をあげてこたえているとき、金正日同志は誰かを探しているかのように人びとを見まわした。そしてその文筆家を認めると、満面に微笑をたたえて答礼した。

20 年以上も前に大学の教壇に立っていたかれをすぐに見分け

たのである。

金正日同志は丁重に頭をさげるかれの手を取り、なにか言おうとしたが、思い直したようにかれの手を強く握りしめて振った。

このとき主席が人びとのあいさつを順に受けながら近づいた。そして金正日同志からかれを紹介されると、こうしてみんなに会えてうれしいと言ってやさしく握手を求めた。

記念撮影がはじまったが無上の光栄と幸せな一瞬を永遠に映し出すその意義深い瞬間がどのようにすぎたか、かれはなにひとつ記憶していなかった。

再び場内に歓声があがり、主席は出口へ向かって歩いた。

あとにつづく金正日同志は数歩あるいて立ちどまり、かれに手を振った。

『労働新聞（ロドンシンムン）』に記念写真が掲載された日、かれはこの幸福を家族とともに早く分かちあおうと、急いで帰宅した。家には娘たちがみな帰っていた。

幸せに酔っている娘たちにかれは襟を正して言った。

「昔からもっともありがたい恩人を命の恩人と言っている。だからお父さんやお母さんそしておまえたちみんなにもっとも貴重な永遠の政治的生命を与え、守り輝かせてくださる金正日同志はわが家の永遠な恩人だ。これをいつまでも忘れてはいけない」

ある海外同胞の願いも

1973 年夏、万寿台（マンスデ）芸術団は日本の地をわかせながら大盛況裏に公演をつづけた。

行く先ざきで絶賛をはくし、生まれてはじめて見る恍惚の芸

術という賛辞を浴びた。
　福岡での公演も成功をおさめた。割れんばかりの拍手を送った観衆は、幕がおりてからも帰ろうとせず、劇場の内外でざわめいた。
　多くの人たちが舞台裏へやってきて俳優や歌手に会おうとした。
　そこには幼い娘を連れた中年の在日同胞もいた。
　当地の商工会会長だと自己紹介したかれは、公演に感動して訪ねてきたと言っていろいろなことを話したが、そのあとも帰ろうとせずなにか言いたげにもじもじした。かれの幼い娘もなにを期待してか責任者をちらちら見ていた。
　責任者はそれとなくたずねた。
「なにかとくに用があって来られたようですが、遠慮なくおっしゃってください」
「万寿台芸術団の公演に魂を奪われ、このまま帰る気になれませんでした。わたしは公演を見て金正日先生の指導の偉大さをはっきりと知りました。金正日先生の指導があればこそ、このようなすばらしい芸術が花開くのだと切実に感じたのです。それで、ちょっとばかし素質があるこの子を祖国の音楽大学で勉強させたいと思ったのです。つまり娘を金正日先生にお預けしたいのです。それで…」
　かれの願いは切々としていた。娘はまだ幼いが、祖国へ送って勉強させたい、祖国へ送れば安心できると言うのである。
　まだ物心のつかないかわいい娘を他人に預けるというのは誰にでも容易にできることではない。親戚や世話をやいてくれる知人もいない、海の向こうのはじめての土地へ幼い娘を送るには、

そこに親に勝る保護者がいる信頼できる土地でなければならない。
　在日同胞にとって、そのような土地は金日成主席と金正日同志によって導かれている祖国であった。祖国ならためらいなく愛するわが子を送れるかれらであった。
　報告を受けた金正日同志は、総聯福岡県商工会会長の願いを奇特なものとして、かれの娘を祖国の平壌音楽舞踊大学で勉強させるようはからった。
　少女は家族と別れて一人祖国の地を踏んだ。まだ幼い彼女に才能があるにしてもどれだけあろうか。しかし金正日同志の意を受けた平壌音楽舞踊大学の教職員と学生たちは、彼女をあたたかく迎え入れて格別に援助し、指導した。
　彼女は音楽舞踊大学を卒業しピバダ歌劇団の俳優になり、やがて金正日同志の配慮で革命歌劇『血の海』の母役に抜擢された。
　彼女は血の海、いばらの道をかきわけて革命家に成長する母の役をりっぱに演じた。
　革命歌劇『血の海』を見た人びとは感動した。
　ヨーロッパのある国における世界音楽コンクールで彼女は特別賞を授与された。
　金正日同志は彼女をりっぱな声楽家に育てながらも、その栄誉のすべてを彼女のものとして、功労俳優称号を授けるようはからった。
　いつだったか祖国を訪問した彼女の母親は、見違えるように成長した娘に会ってうれし涙を流した。
　「この子はもちろんわたしが生みましたが、金正日先生が育ててくださった労働党の娘です。この子を日本に残していたとしたら、音楽家になどとてもなれなかったでしょう。金正日先生の

ふところは、異国で暮らす在日同胞の希望と素質まで察し花咲かせてくれる、この世でもっとも慈しみ深い父のふところです」

丸太とヘリコプター

清川(チョンチョン)江の流域に大雨が降った 1975 年 9 月 1 日、速度戦青年突撃隊員たちは清川江に架ける大鉄橋工事をつづけていた。

かれらの不屈のたたかいで、いまや、中央の二つの橋脚間に橋げたを設ければ工事は完了し、凱歌をあげることになる。それでかれらは、この 3 日間やむことなく降りしきる雨をものともせず作業に取り組んでいたのである。

上流に暴雨があったのか時間とともに水かさが増し、豪流は新設の橋脚を脅かしはじめた。

危険だから即時作業を中止して撤収せよ、という指揮官の声が四方であがったが、作業はやむことなくつづいた。

(これしきのことでへこたれるようではどうして血気さかんな青年と言えよう。いまこの時刻にも親愛な指導者同志は鉄橋工事が完了したという報告を待っておられる。難関にめげず突貫しよう)

突撃隊員たちは詩を朗誦したり革命歌を歌ったりしながら、橋脚に橋げたを設ける準備をおし進めた。

そのとき、指揮官が川岸に走ってきて叫んだ。

「早く岸にもどれ、洪水だー」

轟々たる水流の音にまじってやっと聞こえるその叫び声を耳にして、上流の方を見ると早くも洪水の第一波が丸太を流し岩を転がしながら押し寄せてきていた。設けて間もない橋脚にそれが

ぶち当たればひとたまりもないであろう。
「撤収しろっ、早くー」
指揮官に促されてみんなが川岸に引き揚げたとき、激流が橋脚の一つを轟音とともにおし崩した。
橋脚を結ぶ仮橋も氾濫する水中に没した。
このとき悲鳴に似た叫び声がした。
「向こう側の橋脚に隊員たちがいるぞっ」
「かれらを救え」
そこには、逃げ遅れた数名の突撃隊員がすぐ足下で逆巻く激流に脅かされながら救いを求めていた。
屈強な突撃隊員や指揮官がかれらを救おうと腰に綱を結んで水中に飛びこんだがすぐ岸に押しもどされてしまった。たとえ泳いで行けても流れてくる岩や丸太にぶつかればそれまでである。途方に暮れてかれらはおろおろした。
そのなかには清川江の岸辺に住んでいる年寄りがいた。かれの孫も橋脚の上に取り残されていたのである。ここに生まれ育ち、、祖国の解放前、川が氾濫して家族を失い家も流されるという恐ろしい出来事を体験していたかれは気が動転していた。
鉄橋建設指揮部は事態を平壌の青年突撃隊指導局に至急報で知らせ、数分後につぎのような返電をもらった。
「鉄橋建設指揮部へ。橋脚上の青年突撃隊員に勇気を与えよ。即時対策を立てる」
同様な至急電報は地元の党組織と党中央委員会関係部署のあいだでも行き来した。
事態はただちに金正日同志に報告された。
「このことをなぜいまになって知らせるのです。…　清川江

鉄橋工事中の速度戦青年突撃隊員たちが大水のため危険にさらされているというが、かれらはわれわれの大事な人たちです。どんなことがあっても救い出さなければなりません」

　金正日同志は顔色をくもらせてこう言うと、すぐ人民武力省に電話をかけ、青年突撃隊員たちをヘリコプターで救出するよう指示した。

　やがてつぎの電報が現場に届いた。

　「鉄橋建設指揮部へ。金正日同志が橋脚に取り残された青年突撃隊員の救出にヘリコプターを送った。すぐに到着する。数分間持ちこたえること」

　電報の発信者も受信者も感動に頬を濡らしていた。

　やがて清川江の上空にヘリコプターが現れた。

　「万歳！」

　「金正日同志万歳！」

　川辺でも橋脚の上でも歓声があがった。

　機首を徐々にさげたヘリコプターは、鉄橋建設場の上空を旋回しながら拡声器で叫んだ。

　「速度戦青年突撃隊員のみなさん！　金正日同志がみなさんの救出にこのヘリコプターを送ってくれました！」

　激流の轟音をおさえて万歳の歓声が再びあがった。

　橋脚上空のヘリコプターから梯子がおろされた。

　隊員たちは梯子の手すりをつかんですすり泣いた。助かったことが夢のようであり、また金正日同志の温情があまりにもうれしくて、梯子を登ることを忘れていたのである。

　そのうち水位はさらに高まり、いまにも橋脚がおし流されんばかりになった。

「危険だー」

「早く梯子を登れっ」

岸では声をあわせて叫んだ。

橋脚の突撃隊員たちは年少の者から先に梯子を登らせ、ついで一人二人とあとにつづいた。最後の隊員が梯子をつかんだ瞬間、天地が崩れるような轟音とともに橋脚が崩壊し、水中に没した。

かれら全員を乗せたヘリコプターは、軽快な音を立てて川岸にゆっくりと着陸し、たちまち大勢の人たちに取り囲まれた。扉が開いて命拾いした突撃隊員たちがにこにこしながら飛びおりた。

「大丈夫か！」

「いったい夢ではなかろうか」

抱き合って喜ぶ人たちの目が涙にうるんでいた。

そこへおろおろと人波をかき分けて前へ出てきた年寄りがいた。例の老人である。

かれは人びとの肩に乗せられてくる孫に抱きつき、うれし涙を流した。

「みなさん、1944 年の大洪水のとき、一家親戚 16 人がこの清川江にのみこまれ、わしは流れてくる丸太にすがってやっと命拾いをしました。ところがきょうは金正日先生がわしの孫をヘリコプターで助けてくださったのです。昔だったら夢にも考えられぬことです。ほんとうに金正日先生は万民の救いの星です」

老人の頬を涙が伝っていた。

流れてくる丸太にすがり偶然に一命をとりとめたその過去と、金正日同志の偉大な意を体して孫を救ったヘリコプター。そこにはなんと大きなへだたりがあろうかと、人びとは老人の言葉を聞いて胸を熱くした。

飛行機で運ばれた初物のキュウリ

民族最大の意義深い祝日、金日成主席の誕生日を翌日にひかえて全国が沸き立っていた1975年4月14日。

金正日同志は多忙な時間を割いて、王在(ワンジェ)山革命史跡の建設に取り組んでいる青年突撃隊員の祝日準備状況の報告書に目を通していた。

主席と金正日同志から贈られた食用肉や缶詰、ケーキ類、果物に加えて、地元の党組織や人民から贈られた卵や野菜、豆腐、もやしなどの明細を見ただけでも、祝日のご馳走はたいへんなものだと思えた。けれどもそれだけでは満足がいかなかった。親元を遠く離れて祝日を迎えるわが子に思いをはせる母親のように、祖国北辺の地の革命史跡建設場で額に汗して働く青年建設者に心を引かれて物思いに沈んでいた金正日同志は、一人の幹部を呼んだ。

幹部は重要な用件だろうと思い、緊張して執務室に入った。

「王在山革命史跡の青年建設者に新鮮なキュウリを送るといいが、平壌温室で初物のキュウリを取り入れているだろうか」

「あすの4月15日の祝日を前に、初物のキュウリをたくさんとり入れました」

金正日同志はほほえんだ。

「かれらに祝日の贈り物をしたけれども、ほかになにかもっと贈りたかった。キュウリをとり入れているなら丁度よかった。平壌温室でとったキュウリをみなかれらに送ることにしよう」

「わかりました。そういたします」

「で、初物のキュウリをいつまで王在山に運んでいけますか」
「遅くても 4 月 15 日の夕方まで届けます」
国の北辺穏城（オンソン）までは、汽車で 1 昼夜かかり、穏城から王在山までの陸路も近くはなかった。だからそれ以上早く届けられそうにないのである。
「夕方ですか。… それでは遅すぎます。もう少し早く送れませんか」
かれは返答に窮した。
「もちろん夕方まで送ってもいいが、青年突撃隊員たちの祝日の食卓になんとかキュウリ一つでも余分に載せたいのです。だから 4 月 15 日の朝食前になんとか届けなければなりません」
かれは青年突撃隊員たちへの思いやりに胸を打たれ、なんとかしたいと考えたが、よい案が浮かばなかった。
「キュウリを平壌から清津（チョンジン）まで飛行機で送り、清津から穏城まではトラックを待たせておいて、それで運べばよいでしょう。飛行機はなんのためにあるのです。党の大事な青年突撃隊員のためのこんなときにこそ使うべきです」
深い親心がこもる言葉だった。
こうしてその日、平壌―清津航路をキュウリを積んだ飛行機が飛び、清津空港からは待機中のトラック数台がキュウリを王在山に運んでいった。
意義深い 4 月の祝日の朝、王在山革命史跡建設者の食堂では歓声があがった。それでなくても豪華な食卓に、きわだって目についたのは初物のキュウリである。
もちろん季節になればキュウリはさして珍しいものではない。しかし 4 月中旬とはいえ、当地は畑にまだ種もまかれず、雑草

すら芽を出さない早春である。そんなとき独特な香りのキュウリを味わえるとはなんと楽しいことだろうか。

それがどのようにして自分たちの食卓に載ったかを知った青年建設者たちは、すぐには箸をつけることができなかった。

解職ではなく英雄称号を

1976年11月24日、平壌市党委員会の責任幹部から活動報告を受けた金正日同志は、平壌市建設総局長金秉植（キムビョンシク）の解職が予定されていることを知った。老年のかれに多忙な建設事業を第一線で指揮させるのは困難だというのがその理由だった。

金正日同志は長年重要対象の建設を担当し、熱心に働いてきたかれの功労を考えた。

祖国が解放された翌年の春、興南（フンナム）肥料工場を現地指導した金日成主席は、労働者たちに会って、破壊された工場を自力で建て直せないだろうかと聞いた。すると一人の青年が勢いよく立ちあがった。

「将軍、どんなことがあっても自分たちの力で工場を復旧し、より多くの肥料を生産します。将軍、あまり心配なさらないでください。興南の労働者がいるではありませんか」

かれがほかならぬ金秉植だった。労働者たちの気持ちを代弁したかれは、約束通り工場復旧の先頭に立ち、その後は建設建材工業部門の責任者の一人として長年主席の意にそってりっぱに働いた。

金正日同志は受話器を手にしたまま返事を待つ市党委員会幹部に、強い口調で、建設部門でかれほど経験が多く、功労を積ん

だ人がほかにいるだろうか、そのまま市建設総局長の地位に留めるのがよいと言った。

市党委員会幹部は自分を深くかえりみた。肉体的に老衰したからといって精神的にも衰弱しているとは必ずしも言えない。党が大きな信頼を寄せて育成した、功労の多い幹部をちょっと年を取ったからといって解職しようとしたのはなんと早まった考えだったろうか。…

数日後の夜、金正日同志から電話が入った。親しみをこめてかれのあいさつを受けた金正日同志はこう言った。

「平壌市建設総局長に英雄称号を授けることにしましょう」

短い言葉だったが、かれの感動は大きかった。要職を解かれようとしたかれが、英雄称号を授かる！

解職と英雄称号。このきわだった対照に、かれは党の愛のふところがいかに深いかを改めて考えさせられた。

こうして老年を理由に要職を解かれようとした金秉植の胸には、金正日同志の温情こもる信頼の象徴、英雄の金星メダルが輝いた。かれはその後も英雄にふさわしくりっぱに働いた。

奨学金

豆満江(トウマン)の河口羅先(ラソン)市の沖合にアル島という小島がある。それは島が卵のような形をしているうえ、季節になるとカモメの大群が飛来して産卵し、ひなをかえすので、昔からアル(卵)島と呼ばれていたのである。

島の住人は、以前は世人に知られることなく貧しく孤独に灯台を守ったものだったが、いまでは金日成主席と金正日同志のお

かげで定期航路が開かれて、常時生活必需品が運ばれ、子どもたちはおかの学校で学ぶなど幸せを満喫している。

1974 年 10 月末のある土曜日の夕方、おかで勉強中の子どもたちが定期船に乗って帰ってきた。

「どうしたの。学期休みでもないいまどき、家が恋しくて勉強を怠けてもいいのかい」

わが子に会えてうれしくはあったが、母親たちは勉強にさしつかえてはと、きびしくたしなめた。ところが子どもたちはにこにこして母親に抱きつき、誇らしげに封筒を差し出した。

「なによ、これ」

「そこになにが書いてあるか読んでみなよ」

子どもたちは明るく笑った。

なんだろうかと、父や母たちは封筒に目をやった。

「奨学金」

そしてなかにはお金が入っていた。

「まあ、どうしたわけ？　人民学校や中学校に通っているおまえたちが、大学生みたいに奨学金をもらうなんて」

父母たちは首をかしげた。むじゃきに笑っていた子どもたちが真面目な表情にかえり、一人の中学生が慎重な口ぶりで説明した。

「しばらく前、親愛な指導者先生が、このアル島を視察した幹部から島の状況をお聞きになり、そのさい、島の子らがどう勉強しているかとおたずねになったのです」

幹部は、子どもたちはみんなおかの学校で寮に入って勉強している、学期休みに帰郷するときは、親たちが埠頭へ出迎えに行き、「留学生たちが帰ってくる」と楽しそうに語りあっていると

答えた。

「子どもたちを留学させていると言っているのですか？」

ほほえんでこうつぶやいた金正日同志は、子どもたちには奨学金が支給されているかと聞いた。幹部はけげんな顔をした。大学や専門学校とは違って、人民学校や中学校には奨学金制度がなかったからである。そんなかれを笑顔で見やりながら金正日同志は、かれらも本当の留学生と違うところがない、だから奨学金を支給するのが当然ではないか、と言った。

「おかで勉強しているすべての子どもたちに奨学金を与えましょう。島の子らに奨学金まで与えれば、ほんとうに世に羨むことのない留学生になるでしょう」

こうして、アル島ばかりでなく、東西海岸の大小の島からおかの学校へ行って勉強している子どもたちすべてに、毎月奨学金を支給する国家的な措置がすぐにとられた。奨学金をもらったアル島の子どもたちは、吉報を父や母に知らせようと、週末に故郷の島に帰ったのである。

話は終わったが、親たちは黙然としていた。まったく夢のような話である。子どもたちをおかのりっぱな学校で勉強させてくれた党の恩恵がありがたくて、冗談まじりに「留学生」と呼んでいたかれらだった。

「世にこんなにありがたいことがまたとあろうか。夢のような幸せを授けてくださった親愛な指導者先生に、この親たちはりっぱに灯台守りをつとめ、おまえたちは勉強に精を出して、このご恩にむくいるのだぞ」

一人の灯台守りが涙を手でぬぐいながら言った。

深まる夜。かれらの熱い心をこめて灯台は休みなく光を放っ

ていた。

人造芝にこもるエピソード

牡丹峰(モラン)のふもとに百花が咲き誇っていた1977年春のある日、金正日同志は大マスゲーム『朝鮮の歌』の総合試演を見るために金日成競技場(当時の牡丹峰競技場)におもむいた。

空は一点の雲もなく晴れ渡って暖かいそよ風が花の香りを運んでくる。

不朽の名作『朝鮮の歌』のメロディーとともにマスゲームがはじまった。バックスタンドには由緒深い万景台(マンギョンデ)の生家に明るい太陽がさし昇る荘厳なシーンが描き出された。場面が変わるたびに嵐のような拍手が起こった。金正日同志も微笑して拍手を送った。

場面は移り、幼稚園児が出場するシーンとなった。1 例に並んでいた旗がすべるように左右に動いて開かれた中央入口の方から「やーっ」という歓声があがり、かわいい子どもたちが幹部壇の方に向かっていっせいに走りだした。いまにもつまずいて倒れんばかりの勢いである。いつしかグラウンドを埋めた子どもたちは、愛らしい身ぶりで踊りをおどった。

金正日同志は緊張した心をほぐし、かたわらの幹部にたずねた。

「あんなに激しく動いていると、なにかにつまずいて転ぶようなことがないでしょうか」

「練習中には転ぶこともありますが、ござを敷いてあるので怪我をするようなことはありません」

「ござ?」

こう反問して、金正日同志は何事かを考えた。どうしたのだろうかといぶかりながらも、かれはどう言ってよいかわからず黙っていた。そのござは、農業勤労者たちが金日成主席が観覧するマスゲームを裸の地面でさせるのはよくないと、精をこめて作り贈ってきたものだった。うす緑色のござは柔らかく、子どもたちに喜ばれた。

金正日同志は双眼鏡で地面に敷かれたござを注意深く眺めた。

マスゲームの総合試演は成功裏に終わった。

その日の夜、金正日同志は先ほどの幹部を呼んだ。そして、昼見たマスゲームを録画で見直したが、いくら考えても気にかかって呼んだと言い、競技場に敷いたござのことでなにか考えたことはないかとたずねた。

「ござを敷いたので、子どもたちはたいへん喜んでいます」

マスゲームを指導して、ござがすっかり気に入っていたかれは、そんな気持ちをこう表現した。金正日同志はほほえんで、ござがいくらよくても人造芝に勝るわけがない、と意味ありげにつぶやき、子どもたちが運動中に転んだらすり傷を負う恐れがあり、それにござは現代人の美的感覚にも合わないではないかとたしなめるように言った。

「ござの代わりに人造芝を敷きましょう」

子どもたちへの深い愛情に幹部は感動したが、1 万平方メートルを超えるグラウンドに人造芝を敷けば莫大な資金がかかるので、とまどいを覚えた。

「費用が高くついてもかまいません。お金はどこへ使おうというのです。子どもたちのためなら、国の金を全部使ってもいい。

子どもたちに世界で一番りっぱな人造芝を敷いてやりましょう。そしたら子どもたちがマスゲームの最中に転んでも傷がつかないし、競技場の体裁もととのいます」

子どもたちへの深い思いやりに、幹部は頭のさがる思いがした。

その後、金正日同志は関係部署に指示し、人造芝を買い入れるようはからった。

「子どもたちがきれいな服を着て体操をするのに、地面にござを敷いてはつりあいがとれません。… 競技場に人造芝を敷いてマスゲームをすればたいへんよいでしょう。人造芝を敷いてマスゲームをすれば服の色とも調和していっそうはなやかになるでしょう。… 人造芝を買ってくることです。人造芝を遅くても 8 月初まで購入してこなければなりません。そうすればその上で練習してから本番に入れます。… 人造芝の到着がおくれて行事にさしさわりのないよう、十分な手配りをしなければなりません」

こうして人造芝が競技場に敷かれると、金正日同志はそれを視察した。広いグラウンドに敷かれた緑色の柔らかくきれいな人造芝を眺めたり、子どもたちが転んでも大丈夫だろうかと踏んでみたりして、

「よろしい。これで子どもたちが転んでも別条ないでしょう」

と笑って言った。

世にも珍しいカルテ

1976 年 7 月、速度戦青年突撃隊は清津(チョンジン)—茂山(ムサン)鉄道電化工事に従事していた。

既存の鉄路で列車を正常に通過させながら電化工事を進めるのは容易でなかった。なかでもトンネル内工事は困難であった。電線を上部に引く関係上地面をかなり低めなければならないのだが、列車を定時運行させながら狭くて暗いトンネル内で工事を進めるのは、並大抵のことでなかったのである。

ある日、金正日同志は関係部門の幹部から清津—茂山鉄道の電化工事状況を聞いた。かれは全般的な路盤および電線架設工事の進行状況とあわせて、最大の難工事である車踰(チャユ)嶺トンネルの地面掘削工事について詳しく報告した。

それは並行する二つのトンネルからなり、両者がところどころで貫通しているので、一方を列車が通過すると、他方のトンネルまで煙が充満する。ところがトンネルは長く、煙はいつまでもなかに残るので工事は難渋した。だからといって列車の運行を中止して工事を進めるわけにはいかなかった。当地区の幹線が列車運行を中止すれば、茂山鉱山の鉄鉱石が金策(キムチェク)製鉄連合企業所に届かなくなって、溶鉱炉の火が消えるという重大な経済的損失を招きかねないのである。

幹部たちはとまどいを覚えていたが、青年突撃隊員たちは臆することなく工事を進めていた。昼夜を分かたず突貫工事を進めるそんなかれらに「強制撤収」令がしばしばくだされたが、かれらは仕事の手を休めようとしなかった。ある隊員は指揮官にこう言った。

「中隊長、列車運行を中止すれば定時に交替して外で食事がとれるでしょう。しかしわれわれは列車の運行をただの 1 時間も中断させたくありません。みんながおのれのことばかり考えていたら、国のためになにをやれるでしょうか。親愛な指導者同志

が列車の運行を中断させずに工事を終えたという報告を受ければどんなにお喜びになることでしょうか。あと何日かすれば工事は終わるのですから、どうか仕事をさえぎらないでください」

突貫工事を進める青年突撃隊員の感動的な話を聞くと、金正日同志はかれらの健康が案じられ、物思いに沈んだ。

「清津―茂山鉄道電化工事場で働く速度戦青年突撃隊員たちの面倒をよくみなければなりません。かれらがトンネルのなかで長いあいだ働くわけではないから健康に大きなさしさわりはないでしょうが、汽車の煙が抜けないトンネル内で緊張して働くだけに、安心してはなりません」

しばらく考えていた金正日同志は慈しみをこめて言った。

「速度戦青年突撃隊員たちに補薬を贈り、医療チームも派遣して検診をさせましょう」

このような思いやりある措置によって、平壌から検診チームが現場に向かった。かれらは多くの補薬や治療・予防薬を持っていったが、金正日同志から贈られた高麗人参注射薬と鹿茸注射薬は2万アンプルを越えていた。

車踰嶺トンネルで働く速度戦青年突撃隊員の検診がはじまった。血気盛んな若者たちのことで患者は一人もいなかった。トンネル内工事で健康を害した者とてもちろんいなかった。それにもかかわらず隊員一人ひとりのカルテが作成され、金正日同志から贈られた補薬が注射された。かれらは注射など必要ないと断ったが、医師たちは患者にたいするように厳格な医療規律を適用して、毎日補薬を注射した。かれらのカルテには例えばこう記録されている。

姓名　金哲成（キムチョルソン）
症状　なし。健康な正常体質
病歴　既往症なし
処方　高麗人参注射、鹿茸注射。1日各1アンプル。
期間 30日間
※　疾病はなく健康だが、何日か有害な環境で働いたので金正日同志から贈られた高麗人参注射薬と鹿茸注射薬を用いた。

これまで見たことも聞いたこともないカルテである。昔から薬は病人にだけ使うものとされてきた。それも薬代や診療費を払って。ところが、薬効のもっとも大きい高価な高麗人参や鹿茸を健康な人たちに無料で使ったのだから、到底尋常なことだとはいえないであろう。

速度戦青年突撃隊員たちは涙ながらに注射を受けた。その涙は大いなる愛のふところに自分たちをいだいてくれる金正日同志への感謝の涙であった。

顔色を見ただけで

1977年3月下旬、現地指導中の金正日同志は、ある工場で顔色のすぐれない一女性を見て近寄った。それとも知らず彼女は物思いに沈んで、窓の外を焦点もなく眺めていた。誰かが彼女に注意を与えようとしたが、金正日同志は軽く制した。

人の気配を感じてふり返った彼女は驚いて、夢のような出来事に狼狽し、しばらくはあいさつをするのも忘れていた。

金正日同志は彼女の丁重なあいさつを受けると、にこやかに問いかけた。
「なにを考えていたのです」
「いいえ…なにも…」
女性労働者は顔を赤らめた。金正日同志は、なにも考えていないと言うが、顔にはちゃんと書いてある、と言って笑った。
彼女はささいな私事を話すのをはばかって目を伏せていたが、慈しみ深くおおらかなその方を前にしていると、つい心のうちを語らずにいられなくなった。
軍隊にいる次男に所帯を持たせたが、まだ会えずにいる、やもめのこの母親のもとで育った息子が、どう暮らしているか一度訪ねてみたいと思っていた、年を取ると心配事が多くなるというけれども自分もいらぬ心配をしているようだ、と恥ずかしそうに言った。
金正日同志は、母親が所帯を持った息子のことを考えるのは当然なことだ、どうしてそれがつまらぬ心配事かと言って笑った。そして随員たちの方をふり返った。
「車を提供してお子さんに面会に行かせましょう。結婚して間もないというから、お子さんもお母さんに会いたがっているでしょう。手ぶらで送らず、なにか少し持たせるのがよいでしょう」
深い思いやりのこもったその言葉に、みな熱いものをのみくだした。
顔色をちょっと見ただけで心のうちをおもんぱかり、息子の新婚家庭をはじめて訪れると聞くと、乗用車を提供し、手みやげにケーキ類まで持たせてくれたその温情があまりにうれしくて、彼女は涙を流した。

愛のヘリコプター

1983年11月中旬、北部鉄道工事場は沸き立っていた。

早くも初冬の冷たい風が積雪を巻きあげ猛威をふるっていたが、若者たちの意気をくじくことはできなかった。

いまだに工事場間の通路が開かれず往来が阻まれ、給養物資の供給もままにならないなど、困難は一通りでなかったが、個々ばらばらに深い渓谷で工事に取り組む建設者たちの闘志は旺盛だった。

困ることはといえば、分散している工事場を統一的に指揮しがたいことと、交通の不便なところで急病人が出ることであった。しかし、工事は大いにはかどっていた。

ある日、不意に2機のヘリコプターが現れ数十里にわたる鉄道工事場の上空を行き来しながら、拡声器を通して叫んだ。

「速度戦青年突撃隊員と青年建設者のみなさん！　わたしたちはみなさんの工事と生活をできるかぎり援助せよという親愛な指導者金正日同志の指示でみなさんのもとへやってきました。きょうから工事の指揮者と病院へ送られる患者はこのヘリを利用することになります。そして給養物資もわたしたちが運びます」

青年建設者たちは帽子を振り、声を限りに万歳を叫んだ。

「親愛な指導者金正日同志万歳！」

それは、自分たちの実情を詳しく知り、ヘリコプターまで送ってくれたことへの心からなる感謝と忠誠の叫びであった。

それ以来2機のヘリコプターは北部鉄道建設者の無二の親友となった。毎日ヘリコプターを見ながら各工事場では、革新の炎

がさらに激しく燃えあがった。運ばれた給養物資は建設者たちの食卓を潤し、新聞や雑誌は全国の出来事をいち早く知らせ、故郷からの手紙は嬉々とした笑い声をさそった。指揮官たちはヘリコプターで、数十里離れた工事場から工事場へと敷居をまたぐように行き来しては建設を指揮し、まれに急病人ができてもただちに大病院へ運ばれた。

「きょう、ヘリは来なかったか」

「午前に来たよ」

「じゃ、どうしておれはその音を聞かなかったのだろう」

「仕事に熱中していたからだろう。音を聞かなかったからって、どうということもなかろう」

「いいや。ヘリの音を聞かないと、夜寝つかれないんだ」

「そう言えば、おれもそうだ」

どこでも交わされる会話のひとこまであった。

このようにヘリコプターはかれらの生活に欠かせぬ一部分、友となった。いわば「空の道づれ」である。

日は流れ、完工間近い工事は白熱していた。そんなある日、かれらは思いがけないことを聞かされた。

定期便の旅客機を除いて、全国すべての飛行機が当分離陸を見合わせるようにという指示が通達され、北部鉄道工事場の「道づれ」も基地へ帰らなければならなくなったのである。

寂しい知らせだった。もちろんいまでは通路が開けて現場の指揮や物資の輸送に大きな支障がなく、ヘリコプターの厄介にならなくても大して困ることはなかったが、親しい「空の道づれ」とそんなふうに別れるのはやはり残念だった。

ヘリコプターが帰ることになった日の朝、数十里に及ぶ鉄道

工事場は建設者たちでおおわれた。どうしてすげなく送り帰されようか、総出で見送ろうというのである。
　やがてヘリコプターが現れた。青年建設者たちは手を振り、声を合わせて叫んだ。
「ヘリよ、さようならー」
「無事でなー」
　かれらのなかには涙を流している者もいた。
　ヘリコプターはそれに答えるかのように高度をさげはじめた。ところが拡声器からはこんな声が流れ出した。
「北部鉄道建設者のみなさん、北部鉄道建設者のみなさん！お聞きください。わたしたちは帰りません」
「なに、帰らない？」
　建設場はしーんとなった。思いがけない声にみな呆然となったのである。
「親愛な指導者金正日同志が、わたしたちのヘリはここに残って、ひきつづきみなさんを援助するようにと指示されました」
　一瞬、感激の波がどよめき、万歳の叫びが天地をゆるがした。すべての建設者が涙で頬を濡らしていた。
　拡声器は愛の物語を語った。
　前日の夕方、北部鉄道建設にかんする報告を受けた金正日同志は、建設場のヘリコプターも引き揚げることになったと知ると、ただちに関係者を呼んで、ほかでは飛行機の離陸を許さないにしても、北部鉄道工事場でだけはヘリコプターの利用を中止してはならないと言った。
「主席が北部鉄道建設を年内に完了するよう指示されたのですから、北部鉄道建設指揮用に民間航空局がさし向けたヘリコプ

ターは、そのまま利用するようにするのです」

　温情あふれる指示によって、北部鉄道に送られたヘリコプターの撤収は即時取り消された。

　それは前夜のことであった、とヘリコプターは大声で知らせ、建設場では感激にふるえる万歳の声が高だかと響いた。

異郷で生まれた三つ子

　1981 年 5 月、祖国では初夏の薫風に百花が咲き乱れ、新緑は濃さを増していた。

　そのころ、祖国訪問在日同胞を満載した三池淵（サムジヨン）号が朝鮮東海の青波をかきわけて祖国に近づいていた。

　「祖国が見えるぞー」

　誰かの叫びにみんな甲板に走り出してうっとりと祖国の山河に見入り、そして歓呼した。感激に頬を濡らしながら共和国旗をうち振り、万歳を叫ぶ者もいた。

　そのなかには祖国短期訪問団の女性がいた。彼女は三つ子の娘たちにささやいた。

　「よくごらん。あれがわたしたちの祖国よ」

　彼女の目に露が宿っていた。

　黄金の前には人情もむざんに踏みにじられる異郷で世の荒波にもまれ、涙までひからびた彼女だった。そんな彼女にも目前に近づく祖国の大地を眺めると、こみあげる激情をおさえることができなかったのである。彼女は大喜びする三つ子を見ていると、すぎし日のことが痛く思い出された。

　この子らは生まれ損いと憎まれ口をたたかれていた。お金が

なくては動きのとれない社会で三つ子を生んだとき、家じゅうの者が泣いた。子どもを一人育てるだけでも苦しいのに、いっぺんに 3 人もの子を生んで、この先どうなるだろうか。…　夫までが涙を流すのを見て、彼女は唇をかんでそっぽを向いた。こんなことなら乳も飲まさず、情がわく前にどこかへ捨ててしまうがいいと思った。けれども母性愛とはそんなものでなかった。おなかをすかして泣く赤子たちを前にして胸をかきむしられない母親がいるだろうか。苦労に苦労を重ねて涙ながらに育てた三つ子だった。…

いつしか船は陽光に輝く港湾文化休養都市元山（ウォンサン）の港に碇をおろした。

祖国同胞の歓呼を受けながら船をおりると、祖国の医師と看護婦が近づいてきた。

「ここに三つ子がいませんか」

女性は何事だろうかと思いながら前へ進み出た。医者と看護婦はうれしそうに三つ子を抱きあげ、頬をなでながら、船酔いをしなかったか、この子らが食欲を失いはしなかったか、病気はしていないか、と親切にたずねたうえ、ホテルまで同行するのだった。ホテルでは個室に案内され、子どもたちには予防薬まで飲まされた。母親は感謝しながらも、いったいどうしたわけだろうかと思った。ほかの国では三つ子を生んだら不吉とされ、誰一人見向きもせず、嘲笑さえされているのに、祖国では三つ子がやさしく気を配ってくれる「特別対象」になっているのだ。これがわが国だと思うと、涙がこぼれそうになった。三つ子たちは祖国のどこへ行っても「特別待遇」を受けた。

まだ社会主義の祖国を深く知らなかった女性は、見ること聞

くことすべてが珍しく、感激的だったが、三つ子への温かい関心という一事をもってしても、社会主義祖国がどんなにすばらしいかをしみじみと感じるのだった。

首都平壌のしだれ柳が青々としている普通（ポトン）江畔の蒼光山（チャンググァンサン）ホテルに宿泊していたある日、海外同胞活動担当の幹部たちが彼女を訪ね、その一人が三つ子の母親の手を取って言った。

「おめでとうございます。親愛な指導者金正日同志があなたと３人のお子さんに貴重な愛の贈り物をされました」

彼女はわけがわからず相手の顔を見つめた。

彼は、祖国では三つ子や四つ子が生まれると、金日成主席と金正日同志が誕生を祝って愛の贈り物をするのが慣例となっている、今度祖国を訪問した三つ子のことを聞くと指導者同志はたいへん喜び、主席の名で三つ子に貴重な愛の贈り物をし、異郷の資本主義社会でその子らを苦労して育てている母親にも贈り物をしたと言って、それらを差し出した。

彼女はあふれる涙を拭おうともせず、主席と指導者同志にたいする礼をくりかえし述べた。祝いに来ていた在日同胞たちも涙を流した。

朝鮮人の血を引いた者であれば、地球上のどこにいようと区別することなく、親身になって見守ってくれる指導者同志の高い人徳、深い恩愛を前にして、涙をおさえることができなかったのである。

三つ子の母親は幹部の手を取り、喉をつまらせて言った。

「親愛な指導者先生が子どもたちを国の『王さま』だとされ、三つ子たちに特別の関心をお向けになっていると聞くと、わたしたちの祖国が世界にまたとないすばらしい国だということがよく

わかります。とりわけその方が異郷で暮らすわが子たちを祖国の三つ子とまったく同じように慈しんでくださるのですから、このご恩は死んでも忘れません。父なる主席と親愛な指導者先生のふところこそ朝鮮同胞すべてがいつも運命を託して生きる祖国のふところであることをはっきり知りました。わたしはこの三つ子を親愛な指導者先生にお任せし、その忠実な子に育てます」

彼女は誓ったとおり、日本に帰ってからいっさいのためらいを払いのけて総聯傘下機関に入り、翌年からは三つ子を朝鮮学校で勉強させた。さらに 2 年がたって、彼女は、祖国の真の娘になるには指導者先生のお言葉通り祖国をよく知らなければならないとして、学期休みに三つ子を祖国訪問団に加えて、母国の大地を再び踏ませた。

金正日同志の温情こもる祝福を受けた三つ子はこのように、風波のきびしい異郷でも忠誠のヒマワリとしてすくすく育っている。

4　信　義

約束は法

1970 年 1 月のある日、金正日同志は一幹部に若干の課題を与えてある機関へ送り、夜 9 時まで帰るようにと言った。ところがかれは約束より 30 分遅れて金正日同志の執務室へ現れた。

金正日同志は無言で読みさしの書類に目を通しているだけだった。かれは自責の念に駆られながら遅くなったわけを話した。

しばらくして書類を読み終えた金正日同志は、前のテーブルの椅子に座り直して、静かに言った。

「抗日遊撃隊員は約束の時間に指定の場所へ行き、相手が約束を守らないとその場所を必ず放棄しました。そのときの 1 分 1 秒は死ぬか生きるか、戦闘の勝利を保障できるかどうかという死活の問題となっていました。だからかれらは約束を命がけで守りました。もしいまがそのときだったら、きみのきょうの行動をどう評価すればいいのでしょうか。生活とは複雑なものです。いますぐにもどんなことが持ちあがるか予測しがたいのが生活なのです。だから約束はそうしたすべての場合をあらかじめ考慮し、決して周到さを欠いてはなりません。約束を守るにはどのような状況にも対応しうるよう、ゆとりをつくっておくべきなのです。きみのように 30 分のゆとりもなしに事にあたれば約束を守れるでしょうか。それははじめから約束を守ろうとは考えていない人の行動です」

かれは自分の過失が決してささいな問題でなく、金正日同志の指示をどんなことがあっても守るべきだという心の持ち方が甘いことに起因していることを思い知った。

「約束を守ることは決して簡単な問題ではありません。約束は実践を前提とします。 実践のない約束は不信の原因となります。約束という概念は非常に範囲が広く、父母妻子間、隣同士のあいだ、知人間、革命同志間の約束、すすんでは革命組織や祖国と人民、党と領袖に立てる誓いもその根底にはあくまでも約束が存在します。多くの革命家が断頭台の露と消えながらも組織の秘密を守って最後まで戦ったのも、部隊の突撃路を開くため花のような青春を惜しみなくささげて敵の機銃眼を体でふさいだのもみ

な、自分の組織や祖国への誓いを守ろうという高潔な道義感、気高い使命感をいだいていたからです。だからわれわれは約束を守らないのを単純な問題と見ていません。約束が約束に終わり、誓いが誓いに終わるならば信念のある人間、義理のある人間だとは言えません。約束を法とみなす人間だけが真の革命家、共産主義者だといえます。したがって約束を法とみなし、無条件実行するかどうかは共産主義者の風格をそなえているかどうかの試金石といえます」

　約束を法とみなす透徹した信念と鉄の意志がその風格をいちだんと高めていることを身をもって感じたかれは、襟を正す思いで金正日同志を仰ぎみた。

　「時間をちょっとたがえたことで批判がきびしすぎると考えず、心構えをきちんとしておくことです。厳格な習慣をつけてもらいたくて言うことですから、きっと直さなければなりません。ささいなことのために信用を失うようになれば、ついには大きな不信を買わないともかぎりません。今後、互いに約束を誠実に守りましょう」

敬慕と温情

　黄海(ファンヘ)北道鳳山(ボンサン)郡に住むある老人が薬草を取りに深い山中へ入っていった。

　山里で生まれ育って、山のことなら誰よりも詳しい老人は、いまは子どもたちがりっぱに育って国に尽くしているとはいえ、自分も年はとっていても隠居して無意味に生きるより、まだ体も丈夫だからと、せっせと山の薬草を取っては国に納めているのだ

った。

黄海北道の境界を越え江原(カンウォン)道地帯に踏みこんでからも疲労を覚えず、熱心に薬草を取っていたかれの目が突然鋭く光った。数十年生と思われる野生の高麗人参を発見したのである。

「山人参だ！」

思わずこう叫んで駆け寄り、毛根一つ傷つけないよう注意深く掘り出した。そして人参の花に見入りながら、金日成主席の安寧に思いをいたした。昔から野生の高麗人参を発見すると、そばに人がいようがいまいが、「あの山人参はおれのものだ」と叫ぶならわしが人びとのあいだにあったが、かれはそれを見た瞬間、主席に贈らねばと思ったのである。

そのすばらしく大きい人参をコケで包んだ老人は、ちょっと考えた。薬効が最大の状態で主席に人参を贈るとなると、ぐずぐずせずいっときも早く届けなければならないが、ここは江原道の深い山奥である。道に慣れないうえ、平壌までは 100 里以上もある。それにこんな身なりでは…。だからといっていったん家へ持って帰れば時間が無駄に流れ、それだけ薬効が落ちる。やはり主席のもとへじかに届けよう。…　こう決心した老人は、長生不老の人参を持って険しい 100 里の山道を平壌に向けて一心不乱に歩きつづけた。年は 70 に達していたが、主席への燃える敬慕の念で疲れを覚えず平壌へ駆けつけたかれは、道をたずねながら党中央委員会の正門にたどりついた。

その日も金正日同志は執務室で多忙な時間を送っていた。そこへ一人の幹部が入ってきた。かれは書類に見入っている金正日同志の姿を見ると、声をかけるのをためらった。

「なにか用ですか」

「ある老人が江原道の深い山中で野生の高麗人参を見つけ、それを掘って平壌へ駆けつけてきたのですが、それを主席の万年長寿に役立ててほしいと言うのです」

平凡な一老人の奇特なおこないを詳しく聞いた金正日同志は、そこから主席を敬慕する朝鮮人民の心情をおしはかってか、しばらく室内を黙然と歩いた。

「りっぱな人民です」

高ぶる気持ちをこう表現して深く考えこんでいた金正日同志は、老人の誠意を思ってもその人参は受け取るべきだとし、こうねんごろに言った。

「返礼の贈り物をし、丁重にもてなして送り帰すのです」

人民の道義、本分からして当然なすべきことをしたにすぎないのにもかかわらず、老人を大事にもてなし、家宝として子孫に残す愛の贈り物までしようと言うのである。

こうして老人は首都の大病院に入院してその間の疲労をぬぐい、いろいろな補薬も使ってすっかり元気を取りもどした。退院後は烽火山（ポンファサン）旅館の豪壮な部屋をあてがわれ、毎朝美味な食事をしたあと、車で平壌見物をした。

「田舎者のこの年寄りがなんだというので、指導者先生がこんなにも親切におもてなししてくださるんじゃ。…　こんな待遇をうけるとは夢にも思ったことがありません。この大恩にむくいるには、わしは年をとりすぎているが、孫子たちがきっとご恩にむくいるでしょう」

袖で涙をぬぐいながら老人はこう言ったが、喉がつまって、あとの言葉がつづかなかった。そして、まだ見物するところが多いからと引きとめるのを、こんなに歓待ばかり受けるわけにはい

かない、恩にむくいるには時間が大事だから、早く帰って働かせてもらう、と言い、予定をくりあげて帰った。金正日同志から貴重な贈り物をもらって帰るかれは、車内で何度も一人うなずいた。

(すべての人民にこんな温情がそそがれているからこそ、朝鮮人民は幸せなんじゃ。だからこそわが国は一心団結しているのじゃ。偉大な指導者の温情に、人民のこよない忠誠心と敬慕の念がとけあっているところに一心団結の根本があるのじゃろう)

走る車のなかで

2 月の初めにしては暖かい日和だった。

金正日同志と車に同乗する光栄に浴した人民武力省の一政治幹部は、その喜びに胸をときめかしていた。

窓外を平壌都心の一角が流れていた。このとき、金正日同志が人民軍協奏団のある年配の歌手のことを聞いた。

「かれはいまいくつですか」

政治幹部は困ってしまった。傘下機関にいるその歌手を知らないわけではなかったが、年まではわからなかったのである。かれの顔が赤らむのを見て、金正日同志は慎重な面持ちで言った。

「だからかれの年を知らないのですね。たしか今年の 4 月 5 日が還暦だと思います。一度確かめてみてください」

こう言ったあと、たしなめるような口調でつづけた。

「党活動をするには、人間を詳しく知らなければなりません。かれらの活動状況はもとより生活も具体的に知っていなければなりません。そうしてこそその人を正しく評価できるのです」

かれは頭をあげることができなかった。党幹部としての能力

を十分に身につけていない自分が恥じられた。車は単調なエンジン音を響かせながら静かに走っていた。

「還暦がすぎたら、かれにどんなことをやらせるつもりですか」

かれは顔をあげて答えた。

「少年時代に苦労が多かったうえ、功労もあるのですから、還暦祝いを盛大にしたあと、余生を安楽にすごさせたいと思います」

「老年保障を受けながら休ませようと言うのですね」

金正日同志は深刻な口調で言葉をつづけた。

「かれは党に忠実な人です。祖国解放戦争中ソウルで人民軍協奏団に入り、あのきびしい戦いの日びに前線を巡りながら兵士たちのために歌をうたい、かれらを敵撃滅へと呼び起こしました。いまは人民軍協奏団で大勢の後継者を育成しています」

愛情にみちたこの言葉を聞いて、どうして一歌手の経歴をそんなにも詳しく知っているのかと思い、彼は驚いた。そのように一歌手の隠れた功労まで詳しく知り温情をこめて話しているのにひきかえ、かれの政治生活に責任を負っているはずの自分はいったいなにをしていたのだろうか。…

「かれの面倒をよく見ましょう。これまでずっと主席と党への忠誠心に燃えて働いてきたのです。年をとったからといって見放してよいものでしょうか。党組織が面倒を見るべきです。かれの誕生日には、あなたの言葉どおり還暦祝いを盛大にしましょう。かれの独唱会も催し、国家勲章と名誉称号も授けるようにしましょう」

温情と信頼のこもる言葉を聞いて、かれは大きな感動を覚え

た。全党、全国を指導する偉大な指導者が一歌手にそれほど深い関心を寄せ、大きな配慮をめぐらしているのに、自分はまったく無関心だった、と自らを責めながらも、金正日同志への感謝の念が胸の底からわいた。

車は首都の街路をすべるように走っていた。金正日同志のかたわらに座っているこの長くもない時間に、かれは数十年ものあいだ気づかずにすごしてきた多くのことを学んだ。

なにを惜しもう

花咲く 4 月が来た。その年の春(1981 年 4 月)もひときわ温和な日和がつづいた。日当たりにはレンギョウやツツジの花が咲き誇り、アンズの花もつぼみを開こうとしていた。

党中央委員会の一幹部はこの日も、喜ばしい 4 月の祝日を迎える準備を急いでいた。そんなときに電話のベルが鳴った。

受話器を取ったかれは、立ちあがって応答した。金正日同志だった。

金正日同志はある地方を現地指導して帰ったばかりだったが、その間の疲れをいやそうともせず、金日成主席の誕生日にあたり人民への贈り物の準備状況を知りたいとして、電話をかけたのだった。そして、かれからの具体的な説明を聞くと、それくらいならりっぱだと満足し、そのあと、部署に保管してある補薬を今度の祝日に使おうと言った。

それは人民が金正日同志の万年長寿を祈念し、誠意をこめて贈った貴重な薬品だった。人民から心こもる薬剤を受け取っても、自分は服用しようとせず、いずれ緊要なときがあるだろうから、

よく保管しておくようにと、その部署に預けておいたものだった。それを使うというのだからなにか緊要な用途ができたのだろうと思いながら、かれはつぎの言葉を待った。

金正日同志は慈しみのこもった口調で、年々意義深い 4 月の祝日を迎えるたびに、労働者たちのことが真っ先に思い出される、かれらにできればなんでも与えたいのが自分の心情だと言った。

「人民からもらった補薬を祝日の前に労働者たちに贈るのがよいでしょう。けさ、財政経理部にある補薬明細書をもう一度見ました。牛黄や不老草などの薬を 4 月 15 日にあたり労働者たちに贈ることにしましょう。労働者のためなら、なにも惜しむことがありません」

かれは胸に熱いものがこみあげ、返事ができなかった。

金正日同志は、きっと祝日の前に補薬を労働者に贈ろうと重ねて言って電話を切った。

老闘士の手紙

1982 年 3 月初、新緑が芽を吹く春、一人の老闘士がある景勝の地で何不自由なく病気の療養にあたっていた。かれの心はつねに遠く金正日同志に向けられていた。このように 1 日、2 日とすごしていたかれは、自分の誕生日が間近いことも忘れていた。

ところがその前日、党中央委員会の一幹部が金正日同志からことづかったものだと言って、直筆の心こもる祝賀の手紙と貴重な贈り物を持ってきた。

本人さえ考えていなかった誕生日を祝い、このように大いなる配慮をめぐらされた老闘士は感きわまって、ものも言えなかっ

た。

手紙の行間には、金日成主席に従って革命の草分けの道を歩んだ老闘士たちを朝鮮革命の元老として尊敬し、おしたてるばかりでなく、かれらを自分のもっとも近しい同志として信頼し、心から祝う偉大な人間、偉大な指導者にのみ見られる気高い風格がにじんでいた。

老闘士の頬を 2 すじの涙が伝わり落ちた。70 歳のそれまできびしい世の荒波にもまれてきたかれだった。ふだん笑顔を見せることのほとんどない、むっつり屋のかれも、いまは多情多感な少年のような心情にかえり、高ぶる感動をおさえることができなかった。それで白紙を取り出し、机の前に座った。そしてごつごつした字体で感謝の手紙を書きはじめた。

文筆専門化の使うような修辞はどこにも見られなかったが、そこには老闘士の心の叫び、真心がこもっていた。かれは病気の療養をしている自分に厚い配慮をめぐらしてくれていることに謝意を表し、そばをしばらくでも離れていると無性に慕われてならないとし、金日成主席に従って抗日の数万里を歩んだ自分は、いまは金正日同志を奉じて祖国の統一をとげずにはおかぬ一念に燃えている、どうかむりをされず健康に留意してほしいと書いた。

老闘士の真情こもる手紙はすぐに党中央委員会に伝えられた。

＊　＊　＊

金正日同志が幹部たちと活動上の問題を討議していたとき、一人の幹部が入ってきて白い封筒を手渡し、何事かささやいた。

その場で開封し手紙を読み進む金正日同志はほほえんだ。

「みなさん、この手紙を呼んでごらんなさい」

療養地から老闘士が送ってきたものだと言って渡された手紙を、みんなは読んだ。朝鮮革命のきびしい歴史とともに世の辛酸をなめつくした老闘士の切々たる念願と悲壮な決意がひしひしと伝わってくるかのようであった。金正日同志を心から慕うそのいちずな信念、その真情に心を動かされない者がなかった。

「かれは汪清にいたころから主席に従って革命一すじに生きてきた朝鮮革命の元老です。そんな意味では主席の戦士というより、古い戦友と言えます。そのかれがいまはわたしに従って革命を最後までやりとげると誓い、わたしと行動をともにしています。かれはわたしのもっとも親しい同志です。いわば、かれは 2 代に渡って朝鮮革命に忠誠を尽くしているのです。それでわたしはこの老闘士を愛し、尊敬しているのです」

大きな満足感をこめて老闘士の話をする金正日同志を仰ぎ、一同は、つねに老闘士たちを推賞し、かれらの忠誠心に見習うことを願うその意にそって生きようと心に誓った。

「わたしは老闘士のこの手紙を国宝として保存したいと思います」

そのように謙虚に、そして深い愛情と信義をもってすべての革命戦士を温かいふところにいだいているからこそ、革命の元老たちは金正日同志を指導者にいただき、人間的に魅せられ従っているのだ、と思うと、かれらの感動は深まるばかりだった。

金正日同志は謹厳な表情で言葉をつづけた。

「人間は権力におもねてはなりません。へつらうことを知らないのが朝鮮労働党の気風です。わたしは、二股膏薬が一番きらいです。…　わたしがいつも言っていることですが、みなさんは…人間金正日に従うべきであって、地位を見て従ってはなりませ

ん。官職を見て人に従うのは、既に権力に迎合しているのです。権力に迎合する者は、相手が高い地位にいるときは機嫌をとり、落ち目になると見向きもしなくなります。信念や信義がなく、利害や打算によって同志に対する人間、風まかせに帆を上げる人間は、歌にもあるように、栄光の日はこの道を行き、試練の日はあの道を行くので、有事に際してはどう変節するか分かりません」

千万言を費やしてもほかに表現のしようがないこの貴重な言葉にこもる深い意味を噛みしめながら、かれらは朝鮮労働党の一心団結の源泉がどこにあるかをいま一度身にしみて感じた。

永生のふところ

1984 年 4 月 4 日の朝。平素と変わりなく執務室で多忙な時間を送っていた金正日同志は、老革命闘士呉白竜（オ ベクリョン）が不慮の出来事で危篤状態におちいり、病院に運ばれたという報告を受けた。思いがけない出来事に、驚いて病院に電話をかけ、あの健康なかれがその日の明け方意識を失ったと聞くと、どんな手段や方法を用いても患者をきっと蘇生させるのだ、そのためにはなにも惜しんではならないと強く言った。

病院では強力な医療チームが組まれ、患者の蘇生に全力が傾けられた。しかし患者の意識は回復しなかった。脈搏はきわめて弱く、呼吸音も聞きわけられないほどだった。

金正日同志はほとんど30分おきに電話で患者の容態を聞いた。そのたびに吉報を知らせることができず、医師たちは恐縮するばかりだった。

6回目の電話でもまだ蘇生していないと聞くと、金正日同志は、

いま主席は朝食もとらずに呉白竜の蘇生を待っている、とこう言った。

「わたしは、呉白竜同志が意識を取り戻すまでは、いっさい会議を開かないことにしました。きょう開く予定の政治局会議も延期することにしました。主席も同意されました。だから決定的な対策を講じて、必ず患者を蘇生させることです。吉報を待っています」

切々としたその声に、病院の幹部は全力を尽くすと答えた。

治療はつづいたが容態は好転しなかった。電話がくりかえされ、返答も同じだった。

8 回目の電話を受けたときも、なんと答えてよいかわからずロごもっていると、金正日同志は切々として言った。

「どんな手段や方法を使っても、患者の意識を回復させなければなりません。患者が身体障害者になるようなことがあっても、生命を救うのです。呉白竜同志はただ生きているだけでも、党にとって力になるのです」

電話を受ける幹部の頬は涙に濡れた。あー、その愛と信頼！ それがあるからこそ革命戦士たちはあくまでも党に従い、わが党は不敗なのだ！

金正日同志はその日、夜中の 12 時まで実に 11 回も電話をかけ、翌日も早暁から 6 度も電話で容態を確かめ、必要だと思われる措置はすべて講じた。

このような熱情と恩情が通じ、死境をさまよっていた患者の容態は一時好転するきざしを見せた。

意識を失ってから 3 日目の 4 月 6 日。この日も多忙な合い間にたびたび電話をかけ、患者の蘇生に心血をそそいでいた金正日

同志は、患者がわずかながら意識を回復しはじめたと聞くと、喜んで主席に報告し、病院に駆けつけた。夜中の11時近くだった。

呉白竜の枕もとに座って、まだ昏睡状態からさめていない患者の手を取り、喉をつまらせてその名を呼んだ。

「呉白竜同志、わたしです」

けれどもなんの反応もなかった。患者の脈を取ったり手足にさわってみたりし、胸に耳をあてて心音を聞いてもみた。手足は冷たく、脈搏だけがかすかに鼓動している。それがあまりにも悲しく、大声で患者の名を呼んだ。

「呉白竜同志、絶対に死んではなりません。わたしの声が聞こえますか」

老闘士の娘がたまりかねて、父親の胸に顔を埋めて叫んだ。

「お父さん、どうしたのよ。ちょっとでもいいから目をあけてよ。どなたがお見えになったか。…　金正日同志がお出でになりましたのよ」

朦朧とした意識のなかでも、金正日同志と聞いて、超人的な力をふるいおこしたのか、患者は目を開き、精神力を集中して金正日同志を見あげた。目に涙が光った。起き直ろうとして渾身の力を振りしぼったが、それも束の間で、かれはまた目を閉じた。これがかれの最後のあいさつであった。こうして呉白竜は息を引きとった。

4月7日、金正日同志は党と政府の幹部とともに故人のなきがらが安置されている棲将（ソジャン）クラブを弔意訪問した。

荘重な追悼曲が奏でられるなか柩の前に立った金正日同志はしばらく黙祷したあと、故人の顔に見入った。すると悲しみがどっとこみあげ、ハンカチで目じりをぬぐった。

休憩室に入った金正日同志は悲しげにつぶやいた。
「どうしてこんなに急に亡くなったのだろうか」
そしてまたハンカチで目をおさえた。
「長らく患った末の離別ならこれほど胸が痛みはしないでしょう」
故人と抗日大戦をともに戦った革命戦友や遺族も泣いた。金正日同志は、気を落とさないようにと遺族を慰めた。
「わたしたちの気持ちもこうなのですから、主席の胸はどんなに痛んでいることでしょう。われわれはあたうかぎりの対策をすべて講じたつもりでしたが、恐らく誠意が足りなかったのでしょう」
遺族はただ恐縮するばかりだった。
「そうではございません。親愛な指導者同志は最上の恩情とあらゆる配慮をめぐらしてくださいました」
喉をつまらせながら返礼する遺児の手を取って、金正日同志は言った。
「どうか、心を痛めないでください。気を落としてはいけません。ひたすら主席と党を信じて生きるのです。
困ったことができたら、どんなことでもいい、いつでもわたしを訪ねてください。お父さんは主席に限りなく忠実なすぐれた革命家でした。お父さんの代をついで、党と革命に忠誠を尽くすのです」
父親の世代やその子の世代にめぐらす金正日同志の恩情はこのように深かった。

最上の姿で

革命烈士陵の増築工事がたけなわの 1984 年 6 月 21 日、工事現場を視察した金正日同志は、陵の入口から、記念碑建設上の助言を与えながら階段をあがっていった。

そのころ、万寿台創作社の創作家たちは金正日同志の到着をいまかいまかと待っていた。それまで革命烈士の胸像をどんな材料で作るべきかと、あれこれ素材を変えながら模索をつづけてきたかれらは、こんどこそ結論が得られるだろうと期待したのである。

やがて教育広場にいたった金正日同志は、にこやかに創作家たちのあいさつを受け、胸像模型の前へ歩み寄った。それは人造大理石で作られたものだった。

大理石粉と樹脂接着剤を使った人造大理石の胸像は、白色、クリーム色、あかがね色の 3 種類からなっていた。

胸像模型を注意深く見た金正日同志は、人造大理石は風化しないかと質問し、可塑剤を少し混ぜてあるから大丈夫だと思うという返答を聞くと、ちょっと考えてから、人造大理石で作ったものは石と同じ感じはするが、あまりいいとは思えない、人造大理石製の彫像はまだ把握ずみでないから、それを採用するのは好ましくないとし、胸像模型をたたいてみたあと、深い意味をこめて言った。

「革命烈士の胸像を人造大理石で作ったら、そうとは知らない人は石づくりだと思うだろうが、主席にこのうえなく忠実で、祖国と人民のために一命を投げうった革命烈士の胸像を人造大理

石で作るのはわれわれの良心が許しません」
　すべてを実務的にのみ考えることに慣れていた創作家たちは鋭く胸をつかれる思いがした。この指摘は、革命烈士たちの偉勲を無上のものとしてたたえ、かれらを世界最高の座につけようという、もっとも気高い信義心からなされた良心の声ではないか、と。幹部たちも創作家たちも顔をあげることができなかった。
　金正日同志は胸像模型の前をゆっくり行き来しながら、長い年月がたてば大理石も風化作用で損傷を受けるだろう、以前は花崗岩を使ってもみたが、それには斑点があるので、人物像には適していない、と言った。
　このとき一人の幹部があかがね色をつけて銅像のように見せた胸像模型を指して、意見を求めた。金正日同志はそれを指ではじいてみて、着色したものはやはり銅に劣ると言って笑った。そしてどんな素材で胸像を作るべきかを考えながら行きつもどりつしたあと、きっぱりと言った。
　「わたしの考えでは、革命烈士の胸像をほかの材料を使わず、銅製にするのが一番よいようです。革命烈士の胸像を銅で作れば重みがあり、見た目にもよいではありませんか。銅製にすれば制作も容易だし、長年保持するうえでも好ましいことですが、より大切なのは、われわれの真心がそこにこもり、胸像の品位と重みがいっそう高まることです。銅がちょっと大量に使われるにしても、革命烈士の胸像をすべて銅で作ることにしましょう」
　人びとは強く胸をうたれた。銅以外の安価な素材を使えば国にそれだけ負担をかけずにすむと考えたのだったが、結局それはわが身をなげうって祖国の解放に尽くした革命先達への真情があまりにも薄い考え方だったのである。

1985 年 10 月のある日、完成間近い大城山(テソンサン)革命烈士陵を訪れた金正日同志は満足して言った。

「革命烈士の胸像を銅で作ったので重みがあってよろしい。万寿台創作社の人たちが批判を受けて、革命烈士の胸像を銅でりっぱに作りました。革命烈士の胸像を銅で作ってこそ永遠に光りを失わないのです」

厚い信義心のこもった金正日同志の言葉を人びとは胸に深く刻んだ。

金星メダル

1984 年 11 月 2 日。多忙な時間を割いて革命烈士陵を現地指導した金正日同志は、花輪献呈台を設ける場所の前で、現場責任者から工事の進行状況報告を聞くと軽くうなずき、慎重な口調で言った。

「花輪献呈台をりっぱに作らなければなりません。革命烈士陵には国の祝祭日に朝鮮人民だけでなく、外国人も大勢訪ねてくるのですから、花輪を献呈する場所を作らなければなりません」

金正日同志は、花輪献呈台を設ければ、以前のように革命烈士陵の胸像区域の最上の位置まで花輪を持っていかなくても、まず花輪を献呈したあと、左右の階段をあがって胸像区域を巡ることができると言った。みんなは、それまでは記念日になると参例者たちが一番上の場所まで花輪を持ってあがるので、胸像区域がこみあっていた情景を思い出した。

「花輪献呈台が出来あがれば、一切の花輪献呈式は花輪献呈台の前ですべきです」

こう言って花輪献呈台の位置を確定した金正日同志は、金日成主席の親筆碑と頌詩碑が花崗岩で作られているから、花輪献呈台は黒い石材を使うべきだと指摘した。記念碑の造形的形象創造で対照法の長所を生かすようにという賢明な助言である。

金正日同志は花輪献呈台をどのような形式で構成する計画かと聞いた。そして、臨時につけてある 5 先の星を指しながら、そこからガス炎が燃えあがるような形式にしようと考えているという返答に、

「花輪献呈台の前にガス炎を燃えあがらせるのはやめるべきです」

と否定し、それはわれわれの方式ではない、それにチュチェ思想塔には烽火をおく形式にしたのだから、ここでまたガス炎を燃えあがらせる必要はないと強く言った。

金正日同志はかれらに立ち入った助言を与えはしたが、まだ心が安まらず、後日、再び現地へ行って花輪献呈台の模型を見た。

このような深い関心のもとに、花輪献呈台は日を追ってその姿態を現しはじめた。

1985 年夏、金正日同志は再び現場を訪れた。そしてバンド装飾の 5 先の星を見て、黙然と何事かを考えてからこう言った。

「革命烈士陵の花輪献呈台には 5 先の星よりも、主体性をきわだたせて共和国英雄メダルを大きく浮き彫りにするのがよいでしょう。革命烈士陵に安置される革命烈士のなかには抗日革命闘争期に犠牲になった人たちが多いのですが、かれらはみな共和国英雄だと言えます。革命烈士陵の花輪献呈台に共和国英雄メダルを大きくりっぱに浮き彫りにする方が、5 先の星を浮き彫りにするより、内容もあり、意義もあります」

それは実に非凡な着想であり、気高い愛の極みと言えた。幹部や創作家たちは胸の激しいときめきを覚えた。

金正日同志は、共和国英雄メダルの陽刻図案をりっぱに作ることをはじめ基壇石の形や色彩にいたるまで周到な方案を示して歩みを移した。

胸像区域の階段をゆっくりあがっていた金正日同志は、一部革命烈士の胸像に英雄メダルがつけてあるのを見てこう言った。

「英雄メダルを、わが国の解放後も生存して戦い犠牲になった革命烈士のうち、英雄称号を授った人たちの胸像にだけつけ、抗日革命闘争期に犠牲になった革命烈士の胸像にはつけないというのはよくありません」

そして、実際、国の解放後まで戦って犠牲になった烈士だけを英雄と見るべきでない、呉仲洽（オ ジュンフプ）の胸像には英雄メダルがないが、かれをどうして英雄と比べられようか、抗日革命闘争期に英雄称号を授与する制度があったとしたら、かれらは一人残らず英雄称号を授けられたであろうと、こう強調した。

「革命烈士陵に安置された革命烈士はみな英雄です。だからかれらを革命烈士陵に安置し、胸像を建立するのです」

一同は、すべての問題を政治的角度から幅広く考察できず、ただ実務的にのみ考えたあまり、抗日闘士の偉勲にも格差をつけ、英雄メダルをつけたりつけなかったりした自分たちの浅はかな措置を深く反省した。

こうして、個々の革命烈士に英雄メダルをつけることが中止され、花輪献呈台に全体として一つの大きな英雄メダルをつけることになったのである。

金正日同志の発意になるもっとも価値ある集団的表彰、モン

ラン（オオヤマレンゲ）の花の装飾がほどこされた荘厳な花輪献呈台の共和国英雄メダルは、抗日革命烈士の偉勲に輝く金星、革命の新しい世代が代をついで進むべき闘争の前途を照らす金星として永遠に光り輝いているのである。

朝鮮・平壌

1995